

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビルテ113

TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI NEWS

048 MAY 20.
1999

発行者
都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集テーマ：「下町・界隈」

- | | |
|---------------------------|----|
| 1. 下町が示唆するもの | 1 |
| 2. アーバン・ラビリンス | 4 |
| 3. 下町・界隈と中心市街地について | 6 |
| 4. 下町・界隈について | 8 |
| 5. 歴史と四季が大路小路を彩るまち
・山口 | 11 |

●寄稿

- | | |
|---------------------|----|
| 西ドイツにみる21世紀の都市計画の潮流 | 13 |
| ●委員会活動報告 | 18 |
| ●ブロック例会レポート | |
| ■四国ブロック | 19 |
| ■関西ブロック | 20 |
| ■関東ブロック | 21 |
| ●事務局より | 24 |

特集：下町・界隈

下町・界隈は、これからどうなっていくのだろうか、ひょっとしたら言葉のみになっていってしまうのではないか、いやいやいろいろなスタイルで残っていくヨ。。。下町と界隈って、ちょっと違うんじゃないかな？！。。。創るものではなくあるものではないのか？。。。。などなどこの特集を組むについて、いろいろな議論があった。

一方都市計画、都市整備の分野では平成10年に中心市街地活性化法ができたこともあり、中心市街地の活性化が大きな課題となっている。中心市街地論のなかで、下町・界隈は、その街を街らしくするという意味で、重要な検討ポイントである。

以下の下町論は、各分野・地域で活躍する執筆者にお願いし、欧米の例、大都市・地方都市の例

をとりあげつつ、単なる現象論・文化論としての下町・界隈ではなく、その街の存続や活性化をからめて、展開して頂いたものである。

中心市街地は都市環境デザインの重要分野の一つであるが、そのなかにある「下町・界隈」は、いわゆる法制度や基盤整備手法を含むグランドデザインのレベル、地区・街区デザインのレベル、道路・広場等個別施設デザインのレベル、そこにおける人の暮らしのデザイン（ありよう）の側面など、複合的な観点から見ないと、その意味は見えてこない。

ここに掲載した5つの小論は、それぞれの観点に関し、重要な示唆を与えるものと思う。これを素材とし、いろいろな地域や、まちづくりに係わるいろいろな立場の人々において、現在的な下町・界隈論が展開されれば幸いである。

(編集担当：地域まちづくり研究所 伊藤光造)

特集

1

下町が 示唆するもの —職住遊一体の町

久木田 祢一
KUKITA TEIICHI
(株)邑計画事務所

東北ブロック幹事

1. 下町（したまち）とは

下町は、辞書を引くと、「低いところにある町」「商人・職人などの多く住んでいる町」とある。対比語として『山の手・上町』があげられている。ついでに上町（かみのまち・かみまち）を引くと、「上手にある町」「高台にある町」とある。さらに、和英辞典で下町を引くとdowntownとあり、対比語としてuptownが載っている。英語のdowntownは、「町の中心街」「商業地」などを指す。日英が照応していて面白い。

ところで、なぜ低いところに商人や職人の町が発達したのか。なぜ低いところに町の中心街が生じたのか。為政者の居城や宗教施設などが一般には高いところに築かれることが多いが、それとの相対的な関係で低いところに商人町や職人町がつくられたものなのか、あるいは舟運などの交通の便によるものなのか、はっきりしたことはよくわからない。網野善彦著『無縁・公界・樂一日本・中世の自由と平和』によれば、「行商人や芸能民、

その他の遍歴民などが集まる門前、河原、中州などの無主の地が都市のできる場所」とあり、都市の成立とかかわっているのかもしれない。ここでは、この問題にこれ以上深くはかかわらないことにして先に進む。

下町の類語ないし関連語を探すと、盛り場・繁華街などが思い浮かぶ。しかし、もちろん、これらは重なるところもあるが、イコールではない。

さて、これらを手掛かりに、「下町とは」を考えてみる。

城下町とか宿場町などが、ある町全体の性格や成り立ちを表しているのに対して、下町は、町全体を指すのではなく、町のある部分を指す言葉であることがわかる。このことと関連して、下町は絶対概念ではなく、相対概念であるといえる。つまり、下上、低い—高い、中心—周縁などの空間的な関係を表す対概念の中で規定されるのが、下町（あるいは上町）であるということがわかる。

さて、次に、上のことを視野に入れながら、さらに下町という言葉から一般にイメージされる点を列挙してみると、次のとおりである。

- ①新旧で分けると、どちらかというと古い町を指すことが多い。
- ②計画的一自然発生的という区分でみると、半ば自然発生的な町であることが多い。
- ③用途でみると住居専用ではなく、商業を含む複合的な用途が混在した町といえる。
- ④職住の近接一分離という区分では、職住近接、職住一体が下町の特徴といえる。
- ⑤下町情緒や下町特有の人情という言葉があることからもわかるように、昔ながらの近隣関係やコミュニティ意識が残っている町といえそうである。これは上の職住近接・職住一体と密接にかかわる。
- ⑥寺や神社などが町の中で重要な位置を占め、祭りをはじめ、その町特有の行祭事が伝わっている。
- ⑦日常の暮らしに必要なものがワンセット、一通り揃っていて、町が暮らしのフィールドになっている。

2. 下町（したまち）が示唆するもの

上にみたような下町らしさ（特質）が、現在の都市を議論したり、あるいは都市を再生・創造する場面で、なにがしか示唆するものがあるだろうか。あるとしたら、それはどのようなことかを考えてみたい。特に、地方都市の中心市街地の再生とからめてみてみたい。

下町の特徴の中で、最も特筆すべきことは、職

住近接ないし職住一体の町ということではないだろうか。このことが基底にあって、濃密なコミュニティの形成、祭りなどの住民主体の行祭事の開催、日常の暮らしの比較的狭い範囲での完結などが可能となっているとみることができるからである。つまり下町の特質と呼べる大部分の事柄は、職住近接ないし職住一体の暮らし方から派生していると言っていいのではないか。

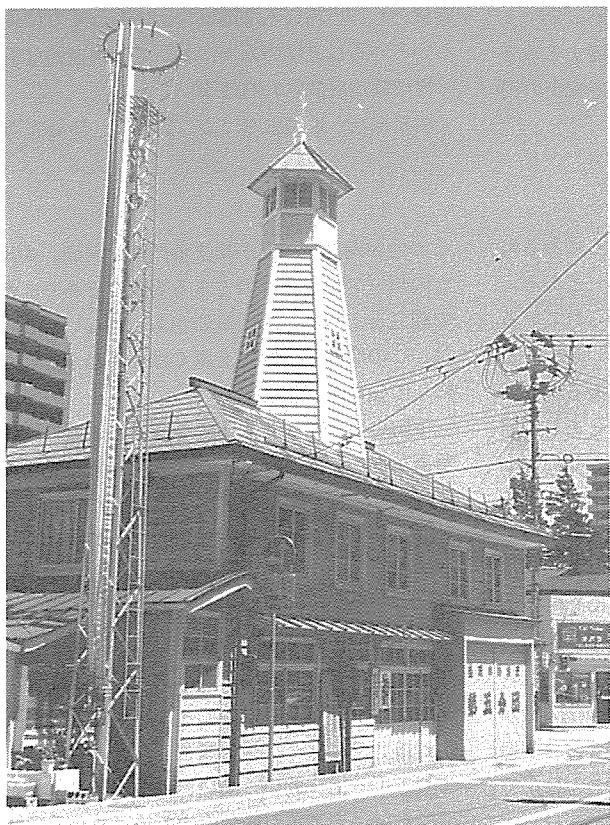
翻って現在の私たちの町では、職住を切り離すことを基本として、まちづくりが進められてきた。用途の純化、戸建持ち家の奨励、郊外型住宅団地やベッドタウンの建設、公共施設の郊外化などである。こうして中心街や中心商店街は、人の住まない町となり、人の絆も切れ、祭りなどの伝統的な行祭事も廃れていく一方となって、現在の事態となった。

中心市街地の再生は、もう一度、人の住める町として甦らせることから始まるのではないだろうか。もちろん、昔の下町でのような職住近接や職住一体をそっくりそのまま実現しようとするのはかなわないことであり、その必要もない。かつての私たちの生活時間は、職と住に当てられていた。ところが現代の私たちの一日は、職と住だけで構成されているわけではない。仲間や友人たちとの交流、外での飲食やパーティ、観劇などの活動にも費やされている。とすれば、職と住に《遊》を加え、職住遊一体の町をつくりだすことを考えてみたらどうだろうか。都心居住を楽しむ術をかつての下町の暮らしから盗みだすこと、都心居住を楽しむ術を新たに編み出すことが、求められているといえる。

3. 盛岡における下町（したまち）

盛岡は築城以来、400 余年の歴史を有する城下町で城址を始めとする歴史的遺構、古い建物、町並みが各所に点在する。

盛岡城下の町割を検討する会議がもたれたことが、古文書（星川正甫著『盛岡砂子』1833年）にみえる。これによると南部利直公は、町割パターンとして、「一の字案」「五の字案」のふたつを



紺屋町の番屋。今も現役で活躍中。
市の保存建造物に指定されている。



蓑手町の御不動さんとして市民に親しまれている。

示し、家臣に諮り、検討の結果、五の字案が採用されたという。盛岡の旧市街地には、昔ながらの細い道やくの字路、丁字路、鍵型路、食い違い路などがあちこちに残っている。こうした道構造は、敵の直進阻止や遠見遮断などの防衛上の要請からつくられたものであるが、それだけではなく町の賑わいなども考慮されたことが、先の文献から読みとれる。

さて、こうして町の骨格を定めた上で、中津川の右岸に城を築き、その周辺は武家屋敷で固め、左岸に商人町や職人町を置き、さらにその外側の丘陵麓に社寺を配した。後に八幡神社の門前界隈にはいわゆる花街が形成された。

盛岡のまちで下町に該当するのは、商人・職人の町である肴町、蕎麦町、紺屋町、鉢屋町などと先に触れた八幡町である。これらの町は、建物が建て替わったり、道が拡がったりして、往時とは大分様子が違ってきているが、いまでもその面影は残っている。さすがに鍛冶屋はなくなつたが、南部鉄器の店、染物屋、煎餅屋、豆腐屋などつくって売る店（職商人の店）、造り酒屋、蕎麦屋などが健在である。これらの昔からの店が中心になって「暖簾の会」というのができている。暖簾の会は代々続いた暖簾を守っていくというだけではなく、古い町並みの保存運動や町の活性化に向けてのイベントの開催などにも積極的にかかわっている。また、昔からの路地を活かした骨董市、花の市なども定期的に開かれ、市民や観光客の好評を博している。

しかし、これらの活動にもかかわらず、古い町に住む人は、次第に少なくなり、夜間人口の減少が続いていた。この地区にある小学校は児童数の減少で、一時その存続が危ぶまれていたが、近年、異変が起きている。ここ10年ぐらいの間に、商家や民家などの細長い敷地を利用した集合住宅（マンションなど）が増え、人口が回復してきている。件の小学校も存続が決まり、今年、新たに建替られることになった。



蕎麦町の路地のここで毎週土曜に花の市が開かれる。
正面は老舗のお蕎麦屋さん。

4. 新たな下町の生成

盛岡は、人口30万人規模の地方都市としては、異例ともいえるほど都心部に立地する集合住宅が多い。現在、約80棟の集合住宅があり、約7千世帯が入居している。これは盛岡の総世帯の6%に当たる。盛岡では、かつての下町が、都心居住の場所として再生しつつあるといえるが、問題がないわけではない。集合住宅の大部分は、いわゆるマンションで、古い町との景観的な調和という点では違和感がある。また、間口が狭く奥行きの長い敷地に建つケースが多いが、これらの建物が隣接して建つ場合には、日照や風通しなどの面で快適とはいえない集合住宅となる。さらに、集合住宅に住む人の場合、町内活動などに消極的ということもあり、昔からの居住者との関係があまりうまくいっていないなどの問題もある。

こうした問題を解決しながら、都心居住を促進するため、盛岡商工会議所は、最近、中心市街地活性化ビジョンの中で、次のような提言を行っている。

- ①新婚世帯や子育て世帯、単身世帯、高齢者世帯など多様な世帯に対応した都市型集合住宅の中心市街地及びその周辺への立地を促進する。
- ②中心市街地及びその周辺において、コーポラティブ・ハウスやグループ・ハウスなどの新しいタイプの集合住宅の建設を促進する。
- ③高齢者のための福祉施設と一体となった公的集合住宅を中心市街地に立地させる。
- ④中心市街地に建設される民間の集合住宅を借り上げ、公営住宅として活用する。
- ⑤中心市街地において商住複合型建物の立地を促進する。
- ⑥中心市街地において居住機能を有する市街地再開発事業を促進する。
- ⑦利便性のある都心居住を実現するため、集合住宅の整備促進と併せ、教育・医療・福祉・コミュニティ施設などの整備を促進する。
- ⑧自治意識やコミュニティ意識を育て快適な都心居住を実現するため、都市型集合住宅に対応した新しい自治会組織のあり方や居住者同士のルールづくりなどについての調査・研究を進める。

これまでの日本の都市計画では、中心市街地や下町は、商業系地域として位置づけられ、商業・業務機能の整備充実が図られてきたが、中小都市においては、商業・業務だけではなく、住宅も視野に入れた複合的機能が集積する地区として位置づけることが必要なのではないだろうか。

ちなみに先に紹介した盛岡の中心市街地活性化ビジョンでは、中心市街地を「快適な暮らしを約束するエリア・誰もが歩いて楽しめる街」として位置づけている。

アーバン・ラビリンス

小宮 和一
KOMIYA KAZUICHI
株式会社 アーバンソフト

1. 街歩きを放棄した人々

「街づくり」や「中心市街地活性化」と、巷の声は日に日に高まるなか、中心市街地すなわち“街”的存在意義に関する議論が様々に行なわれている。しかし、「街を存続させることは本当に必要であるのか？」の問い合わせに対する明快な解答は少ないのでないだろうか。

「街の歴史や文化まで失ってしまって良いのか」「商店街は社会資本なのだから」などという言葉も、郊外の大型店に車を走らせる人々を街の商店街に連れ戻す説得力になるとは思えないのだ。

ある地方都市のホテルのラウンジで耳にした若い女性三人の会話である。

最近、「街を歩かなくなった」「喫茶店に行かなくなった」「洋服も買わなくなった」などなど、つまり若い女性が街中に出なくなったので街に行くための洋服を必要としなくなったと言うのである。

どうやら学校を卒業後就職し、全員がクルマを買った。ローンで購入したその“赤い軽”が自宅と職場を直結する。その間、公共的空間に出ることが無い。だからTシャツ、トレーナー、ジャージ姿でも通勤可能、職場では会社の制服に着替えればよいというのである。そして、携帯電話と缶コーヒーの時代、友達や彼氏と過ごすのに“街という空間”は必要ないと言うのだ。

これでは中心市街地の商店街が「やってられない」のも当然ではないか…。街づくりに関わる一人として私はかなり動搖した。

そして、「中心 v s 郊外」はすでにアクセス道路や駐車場の問題などではなくになっていることを思い知ったのである。

我国独特といえる車や土地に対する“偏愛”は街のさまざまな機能を郊外に押しやり、中心市街地をドーナツの穴にしてしまった。ドーナツの周りにくっつく砂糖（郊外店）には人は蟻のごとく群がる。そしてその穴を埋める策は駐車場や核施設の整備、空き店舗対策などである。

どうもその辺が的外ではないのか。そもそも、街を必要としない又は街に求めるモノが違う人種の増殖が中心市街地衰退の要因と考えるならば、活性化策は別にあるような気がするのだ。

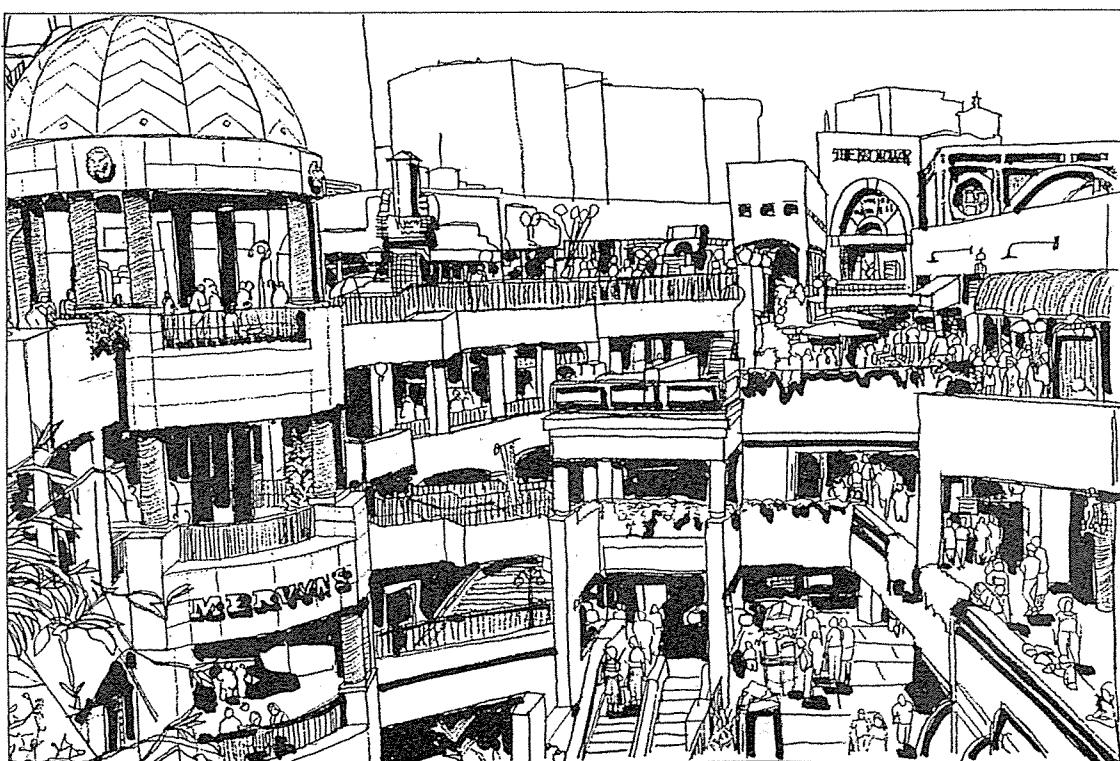
2. サンディエゴ市ホートンプラザの試み

1985年夏、衰退が著しかったサンディエゴ市の中心部は、商業施設を中心とした再開発プロジェクト「ホートンプラザ」によってよみがえった。

大型店、専門店街、劇場、映画館、ホテルなどで構成した複合機能を持つホートンプラザは、ショッピングセンターというよりは街の中に新たに造った「小さな街」の形をしている。

南米をイメージさせるカラフルで深い陰影を持つ建物、曲線の通路や建物を繋ぐブリッジなどが複雑に絡み合う動線、屋台や大道芸人に出会いう街角…。効率第一主義のショッピングセンターの概念から離れた形態である。人々はこのラビリンスに迷いこむことを楽しむ。平均滞留時間は3時間を超えるという。

1950年代、米国のショッピングセンターは、充分な駐車場や経済効率の良い売場面積を確保出来る郊外に出現し、またたく間に中心市街地にとつて代った。しかし成熟化を迎え、地域アイデンティティを持たない立地や、人との出会いが少なく文化を醸成出来ない空間構成がネックであることに気付き始めた。その答えの1つがホートンプラザといえるのだ。



サンディエゴ ホートンプラザ

3. 中年カップルが手をつないで歩ける街

東京・目黒区の南端にある自由が丘は、駅を起点にした半径300 m圏に約1,200 店が立地している。周囲はすぐ閑静な住宅地で、地名のイメージもあり「文化の香のする街」として注目されるようになった。自由が丘の商業はこうした状況を背景にして地元住民に密着しながら、核店舗や駐車場に頼らない特異な発展のしかたをしてきた。

「メープルの木陰で午後の紅茶を飲む」ことが話題になったのは1985年だった。自由が丘の住宅地に出来たパティオ型の商業空間・メープルファームがその舞台である。楓の樹が中央にある小さなパティオの周りをブティックや紅茶の専門店など7店が囲んでいる。いずれの店もカジュアルで少しお洒落である。住宅的な外観は周囲と同化している。

サンセットアレーは幅員4 mにも充たない私道である。赤御影の石畳が200 m続く文字通り「夕陽の径」。沿道にはブティック、生活雑貨店、レストラン、カフェなどが軒を並べる。40代以上を顧客ターゲットにする落ち着きのある店が多い。街路のデザインや各店のファサードが大通りには無い大人の雰囲気を醸しだしている。

こうしたプロジェクト以後、自由が丘に数々のパティオやパサージュなど半公共空間を持つ商業施設が出現し、老いも若きも自由な心で歩き、店を巡り、人や情報と出会うことを楽しめる街として評価してきた。

4. 気持ちを買わせる下町商店街

東京の江東区に、約180 店の食品店や日曜雑貨店などがゴチャゴチャと軒を並べた砂町銀座商店街がある。典型的な下町商店街だ。

夕暮時ともなると各店の店先に美味しいそうな湯気をたてた作りたての惣菜が並ぶ。……と、どこからか湧きだすがごとく小母ちゃん達で幅4 m、長さ750 mの商店街が一杯になる。「揚げただよ」「安いよ」「もってけ」の声に、ジョークを返す客達。いきいきとした“生活”がそこにある。

お客は小母ちゃんばかりではない。小父ちゃん

もいる。おねーさん、外人の姿も多い。誰もが自分の“内の場所”にいる安堵と何が起こるかもしない“ラビリンス”を彷徨う緊張の表情をしている…ように見えるのである。

5. アーバン・ラビリンスへの羨望

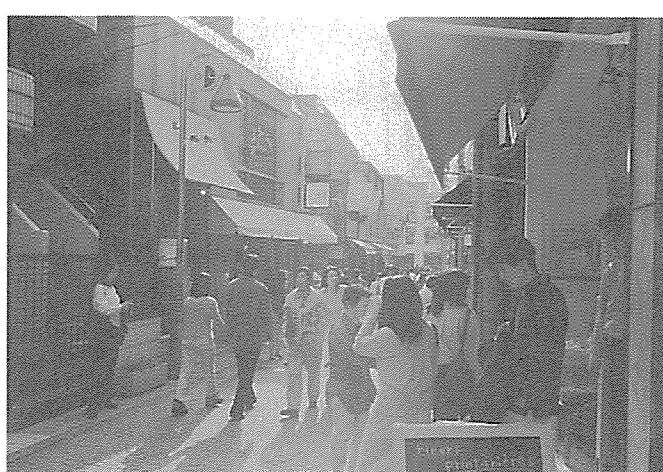
“ラビリンス”なんとも魅力的な語感である。そして人は時々、迷宮を彷徨うことを願望する。

商店街関係のコンサルがよく使う用語に「回遊性」というのがある。この回遊性を高めることで商店街は活性する。と、全国各地で策定された膨大な報告書、提言書には大体書かれている。「回遊」を辞書で引くと「方々を巡り遊ぶこと」（広辞苑）である。すなわち回遊は、1本の通りを行ったり来たりすることではないのだ。したがって、回遊させるには商店街以外の歩行ルートの開発が必要になる。

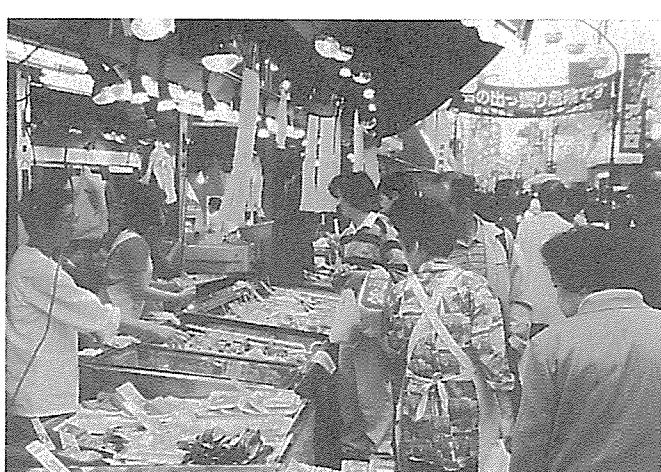
パリのパサージュ（通り抜け通路）は、建物間を繋ぐアーケードのある小路である。小さなカフェ、特色のある専門店などが両側に並んでいる。1822年から数多く造られ、歩行空間のネットワークを築いた。現在も現役のパサージュも多い。このパサージュがパリの街に貢献したのは、歩行者を回遊させ、娯楽や社交の場として機能し、更に新しい文化、思想、芸術まで産み出したことだ…とは、ユダヤ人思想家ヴォルター・ベンヤミンの「パサージュ論」である。回遊を高めることが文化、思想、芸術までに影響したとは“すごい話”ではないか。

さて、街を歩くことを必要としなくなった人達の出現と中心市街地の活性化に話を戻して考えてみる。

ホーリンブラザの例にみるように、米国型消費生活の行く末に求める答えの1つは、都市型ラビリンスの再構築である。また、中心市街地の活性化に必要なのは、郊外の大型開発に同化する施設整備でないことも頗らかであると思う。バーチャルではない「アーバン・ラビリンス」、彷徨う喜びの人々は羨望している。



サンセットアレー



砂町銀座商店街

下町・界隈と 中心市街地に ついて… フランスの都市観から

望月 真一
MOCHIZUKI SHINICHI
アトリエUDI
国際委員

下町というと今では落語か寅さんのイメージが強く、現実の都市の実感としては次第に遠のいているのではないだろうか。生活様式の変化もあるだろうが、街づくりの仕組みのせいと思っている。

あるいは、日本では「下町」と「山の手」が対立概念にあるが、フランスでは通常「街」と「郊外」を対立させるのが普通で、単純に同じ様には考えられない。英語のダウンタウンも下町とは違うだろう。フランスで下町に相当するのは「庶民の地区」といった感じになる。そんな都市に対する概念の違いがあることを前提に思いついたことを指摘してみたい。

1. 住宅都市は都市ではない?!

ラテンの人々にとって都市は単に居住や、ビジネスの場ではなく、人々が出会い語らうコミュニケーションの場であり、文化そのものといえる。また、家庭と同様そこで育ち学ぶ場として、人生の舞台とも考える都市観を持っている。地区により違いはあるが街は人が住み、生活する場で、すべてが混在することが前提である。街はもともと壁で囲われ、中が充足されたとき新たに外側に作られ街が拡大する。従って街は周辺と区画された都市住民の活動空間ですべて下町であるともいえる。住宅都市という発想は、産業革命以降の出現で都市とは対立、矛盾する。

2. 都市居住の様式

日本の中心市街地が全国一律に病んでいるということは、車中心の生活様式と都市計画制度・施策に原因があることを示している。商業者の意欲・努力の問題も大きいと思うが、交通と都心居住が主たる課題と観察する。

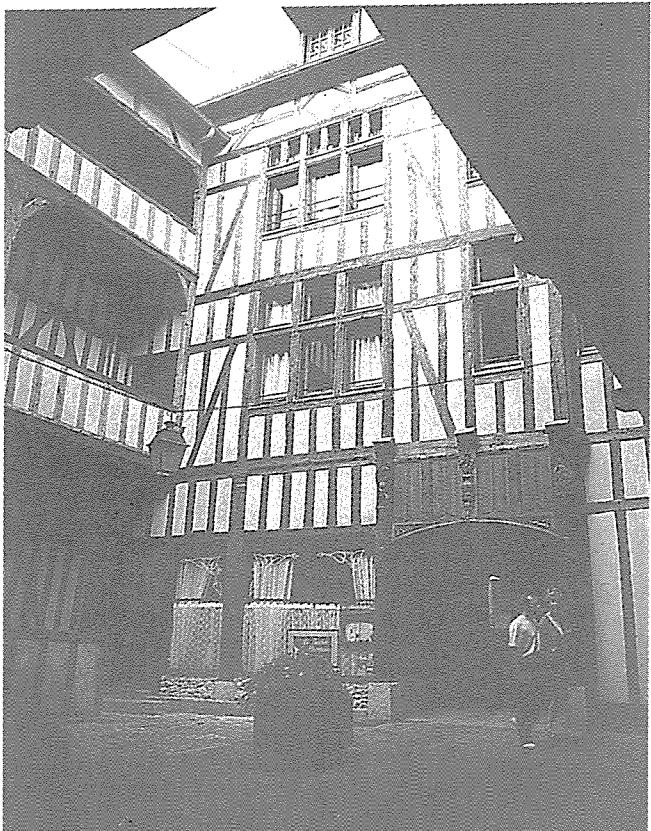
その点で、フランス及び下町に関連して指摘しておきたい第1点目として、都市居住を可能にした建築様式がある。街区を一巡り道路に沿って一様のボリュームのファサードを構成し共有壁を有する高密度な街を実現した。高密でありながら居住環境が維持されているのは、街区の中庭の義務化による。中庭は、採光、通風、緑化だけでなく、設備・動線空間であり、時には公共的な活用や駐車場利用など都市の変化にも対応できる空間である。高密度とはいえる容積は例えパリでも最大350%にすぎない。

日本のマンションの居住性の悪さは自身の土地で完結しようとする建築を街の中で建てることにある。それでも容積不足であるかのように高層建築を建てたがる。フランスでも一時期は機能的な都市建設で理想的な住環境供給するため、アテネ憲章に基づき、住宅団地を郊外に積極的に建設してきた。今では、単一機能がゆえの社会的問題、環境問題等が集中する地区となり、改善、更新に大変な努力をしている。

町屋形式は都市建築として優れているが、我々は近代建築の概念にとらわれ現代的な町屋発明への努力を怠り、街の歴史的な継続性を断ち、脈絡のない都市ができている。京都がもっとも悲惨なモデルとなっている。



パリの街区（エッフェル塔より）



トロワ（中庭）

3. 市場が暮らしを支える

第2点目は、市場の存在を指摘したい。人の住む街であり続けるためには、安全で新鮮な食材が得られることは重要である。定期市の発端は露店を禁止するバーターで定期市を認めたと聞いたことがあるが、これが現代の都市生活にうまく適応した。週に2-3日、カルチエごとに市場が開かれ、おかげでパリでさえどこでも生活に不便はない。フランスでもスーパーが普及しているものの、工場で作られ出所不明の食品を買うよりは、生産者、少なくとも売り主とコミュニケーションしながら買うことで、食文化を蓄積していく。最近日本でも都心居住といい、マンション等ようやく積極的に建設されているものの、都心から八百屋と魚屋などが消えたままだ。下町になりそうな地区にマンションができる、新しい店舗は等しくコンビニかファーストフードの類が一階にできる傾向がある。コンビニの防腐剤入り食品とマニュアル商売のファーストフードでは、人の生きる街にはならない。機能的であっても我々の「ゾーニング」の都市計画では下町を作れない。

4. よみがえった「下町」

フランスの都市計画の制度、政策はあまり日本ではなじみがないが、実際フランスの都市を訪れてみると、どこにもぎわい、日本の中心市街地の活性化に深く悩んでいるのとは無縁のような充実した都市生活が営まれている。今のフランスの都市行政は、「生活の質」を向上することが最大目標となっている。

しかし、石油ショックがあった20年ほど前は、思うに深刻な空洞化があった。中心部のほとんどは古い地区で手当もされずに放置され、夜ともなると薄暗いところが多かった。中心にも関わらず暗い街にぼーっと明かりがあるのはインドシナ難民による中華レストランという印象が残っている。

既存の都市構造を無視して進めてきた近代主義的な都市観の都市行政を反省し、80年代に入って都市政策に大きな転換を図ってきた。マレー法以降生きた街として歴史的景観を保全する考え方で順次改善型整備を進めるようになったこと、地方分権化政策により生活環境に関わる都市計画は自治体自ら決定できるようになったこと、石油ショック以来車に依存した都市生活を見直し公共交通に力をいれ、中心市街地は歩行者優先とする整備を進めてきたことなどで、街は再生してきた。どれも我々には参考となる制度と仕組みを備えている。

フランスでは「下町」が見事によみがえっている。



パリ（オデオン近く）

下町・界隈 について

川井 由寛
KAWAI YOSHIHIRO
SLAスタジオランド
ジャパン株式会社
国際委員



ボストン ノースエンド

1. ボストン・ノースエンド地区

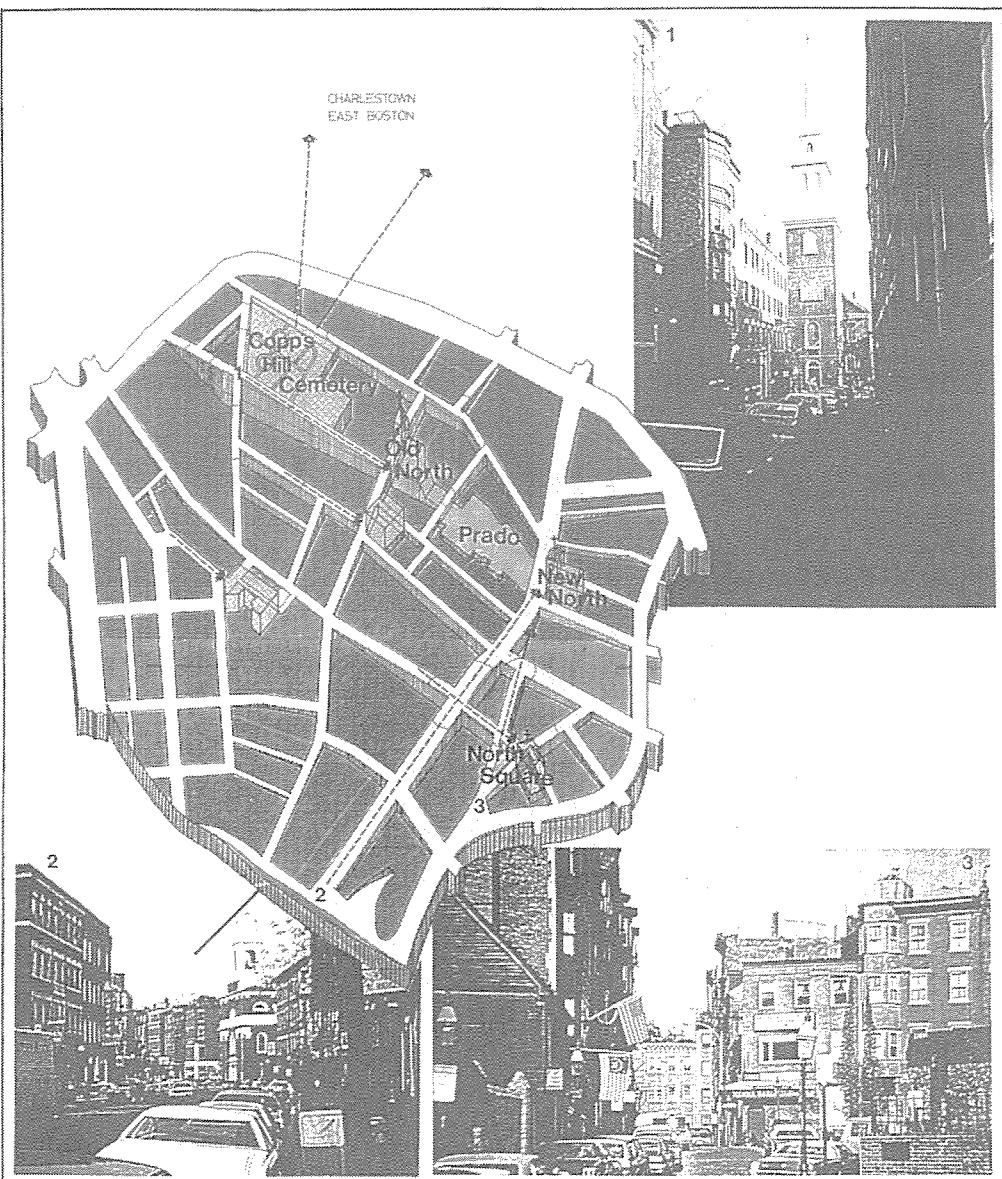
もう20年も前のことになるのだが、私がハーバードのデザイン大学院（GSD）でアーバンデザインを学び始めた時、最初のスタジオの課題は「ディストリクト・アナリシス（地区の分析）」というものであった。

ボストンにはビーコン・ヒル、バック・ベイなどそれぞれ歴史的、物理的に見て特徴のある多くの「ディストリクト」が存在する。東京の中では理解しにくかったケビン・リンチの「イメージアビリティー」なる言葉が非常に良く理解できるまちの構造を持っている。この課題では学生がそれぞれ一つの「ディストリクト」を与えられ、2週間くらいの短い期間でそのディストリクトを観察、分析し、皆の前で発表することが求められる。まさにプロのアーバン・デザイナーとなるための訓練の第一歩として、瞬間にその地域の特性を読み取るということが試される課題である。

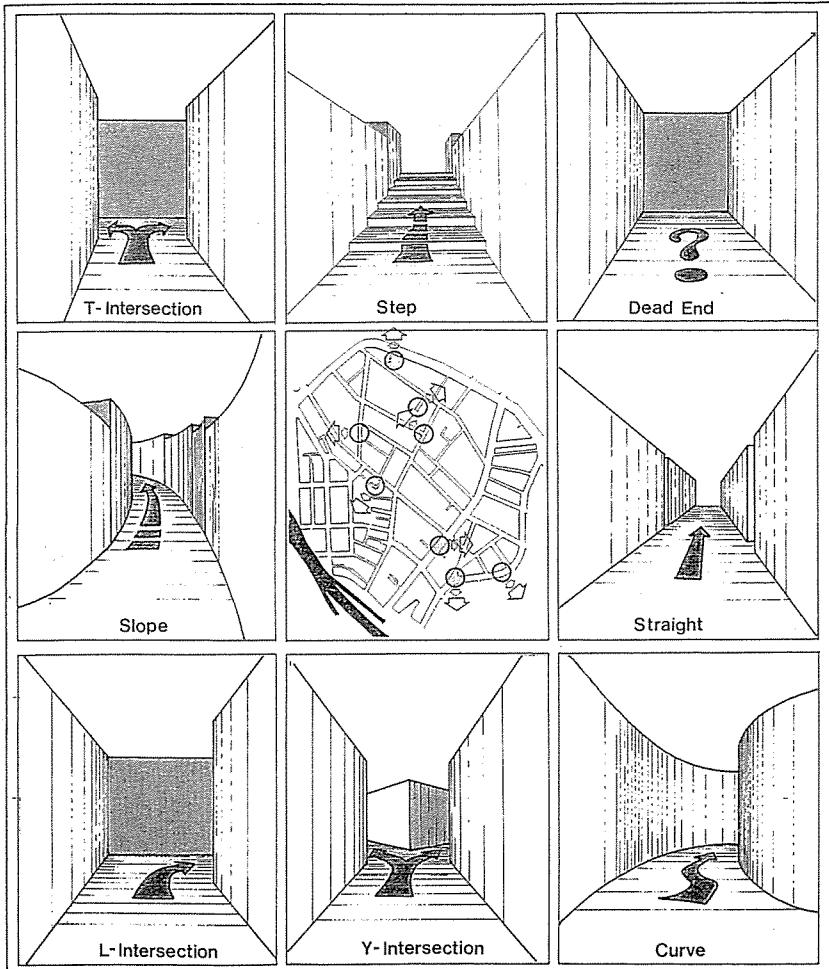
私に与えられたのはノースエンド地区であった。ここはボストンの中でも古い地区の一つで、当時はアイルランド系の移民によって作られたまちで

ある。彼らの経済的地位が上がり、郊外に移り住むようになってイタリア系移民のまちへと変わってしまった。現在ではもともとイタリア人達が作ったかのような雰囲気で、レストランで水を頼むのに「アクア・プリーズ」と言わなければならない。同じ地区を割り当てられた他の学生達の中には、こうした歴史的、文化的なユニークさに焦点を当てて調査、ヒアリングを掛けるものがいた。しかしながらボストンに着いたばかりで英語にからきし自信のなかった私としては、当然のことながらこうしたアプローチを取る訳にもいかず、もっぱらこの地区の物理的な構成を読み取ることとなっただ。

この地区にはアメリカには珍しく界隈性が存在していた。狭い道に渡した紐一杯の洗濯物などは昔見たモノクロのイタリア映画を思い起こさせる。曲がりくねって視界の通らない道や複雑な地形などによってもたらされる思わぬ発見がある。また本来の道以外に恐らく住民が日常的に使っている路地状の通路が数多くみられる。このあたりは私が現在住んでいる世田谷の三宿・太子堂地区とも



ノースエンドスタディ（筆者・ビスタ）



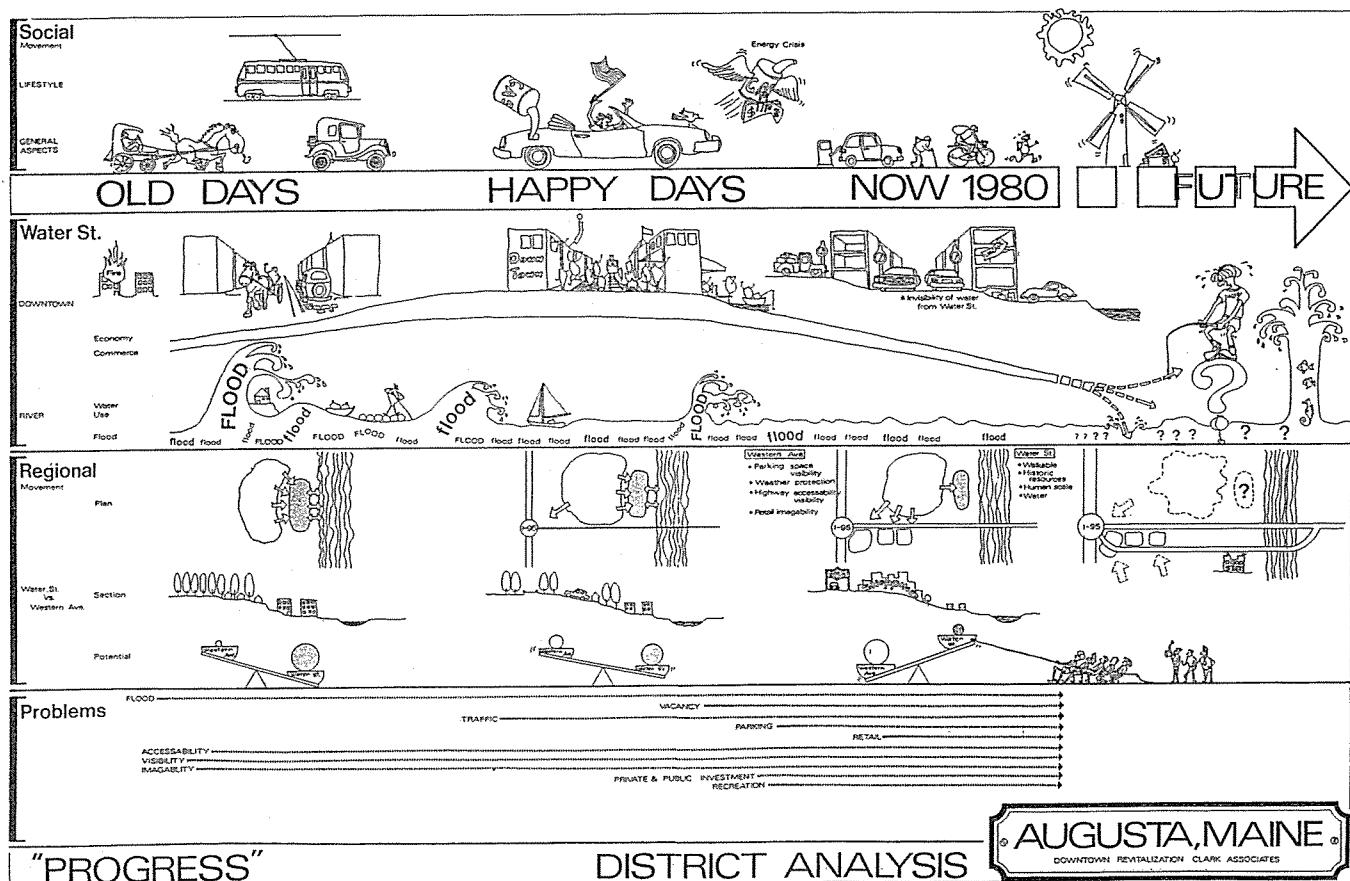
ノースエンドスタディ（筆者・ストリートパターン）

大きな共通性を持っている。ノースエンドにはまた、教会前の広場で老人達がチェスを楽しんでいた、といった日常生活が存在していた。アメリカの多くの地域では自動車がないと生活が成り立たない為に、いわゆる界隈空間など存在しない状況が多い。ボストンに向かう前に少しの間滞在していたカリフォルニアのオレンジ・カウンティーあたりでは、道を隔てたショッピングセンターに買物に行くのにも自動車を使う始末である。

2. ダウンタウンの活性化

次のスタジオで私は「ダウンタウン・リバイタリゼーション」を取ることになった。今まで日本全国で言われている「中心市街地活性化」ということである。メイン州の州都であるオーガスタ市のダウンタウンをどのように再活性化できるか？というのがスタジオの命題であり、最終的に現地の商工会に対し、プレゼンテーションを行った。ここでもご多分にもれず、中心地にある商店街は瀕死の状況であった。毎年繰り返される雪解けによる洪水、慢性的な駐車場不足に加えて、郊外のハイウェイ沿いに出来たショッピングセンター地区に客を奪われ、ダウンタウンとしての活気を失っていた。

一般論になるが、アメリカでは一時ダウンタウンの治安が悪化し、中産階級が郊外のニュータウンに大挙して移り住んで以来、ダウンタウンの不遇の時代が続いていた。こうした状況に対し、歴史的建造物、土地固有の文化資産、高密度でユニークな商業集積などを有機的に絡ませることでダ



オーガスタスタディ（筆者）

ウンタウンの活性化が行なわれるようになった。ファニュアル・ホール・マーケットを軸に再生を果たしたボストン、インナー・ハーバーによるボルチモアなどは初期の好例である。ただ忘れてならないのは、こうしたまちには人々の興味を引き付けるのに足る歴史、文化の香りが残っていた（存在していた）ということである。また、こうした商業集積を支えるだけの十分な人口も、それほど遠くないエリアにいたということである。

最近の日本の「中心市街地活性化」策にはこうした条件を無視して、やみくもに「活性化の方程式」通りに組み立てられている例が多いのではないだろうか？またそうした安易なプランを取りあえずのダミーとしてぶち上げるケースもあるようで、まことに残念なことである。特に過疎化の進む地方では町ごとに同じような活性化策をぶちあげているが、人口増加の止まった現在の日本でこのようなシナリオが成り立たないことは明白である。

3. ダウンタウンへの回帰

ついでながら、最近のアメリカのプランニングの傾向を述べると、一時モータリゼーションの発達と共に郊外のユートピア的生活へと向かった人々の欲求が、また市街地の方へ回帰しているようである。「ネオ・クラシック」とか「ニュー・トラディショナリズム」とか呼ばれる傾向である。ここでは積極的に高密度の商業エリアを人工的に作り出し、道幅もわざとせまくしてヒューマン・

スケールを導入するなどして、古き良きアメリカのダウンタウンを作りだそうとする努力が見て取れる。

例えばレストラン・タウンセンターやプリンストン・フォレスター・ビレッジなどに典型的な例を見ることが出来る。また若干ニュアンスは違うのだがショッピング・モールの作り方（ファッション・アイランドやホートン・プラザなど）にもこうした考え方の影響が見て取れる。こうした空間は「歩いて楽しめるように」、という作り方をされているのだが、皮肉なことにここには自動車で来なければならない。歩いて楽しめる商業施設の廻りを広大な駐車場が取り囲むという面白い景色がそこにはある。私は何もここで「偽」界隈空間の批判をしようとは思わない。ワイキキの浜が人工的に作られているからといって文句を付ける人もいないだろうし、ディズニーランドは何時訪れても楽しい空間である。

結局「界隈性（特に中心市街地の）」とは、「興味深い複雑さを持った物理的空間構成」の中に、「土地固有の歴史や物語が上品に香りづけられた上で、「人々の様々な欲求に答えられるだけの（質、量共に）商業、文化集積が的確に組み込まれた」空間なのではないだろうか。そうしてその界隈を成り立たしめるには、その界隈を愛する十分な人々がその周囲に（必ずしも物理的な距離だけではない）日々生活していなければならぬ。



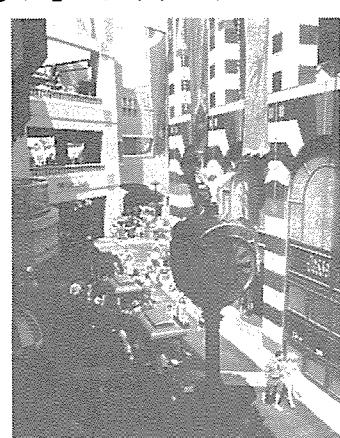
レストラン タウンセンター



アーバイン ファッションアイランド



プリンストン フォレスター・ビレッジ



サンディエゴ ホートン・プラザ

歴史と四季が 大路小路を 彩るまち・山口 市民による界隈の模索

小山 哲彦
TETSUHIKO KOYAMA
小山建築設計事務所 代表

1. 「西の京」の佇まい

山口市は県庁所在都市のなかでも一番人口が少ない。まだ訪れたことの無い人には維新発祥の地なのに人口が約14万人でしかない事が意外に感じられ、来られた人には中心地にほど近い県庁舎付近でも溢れる歴史の香りや自然に包まれている様子が別の意味で意外なようである。

歴史をたどれば室町時代、大内氏は、対明・対鮮交易による富を背景に、雪舟など文人墨客を呼び寄せ文教を高め、一方でサビエルをも受け入れ南蛮との接点も持った。こうして育まれた大内文化と共に「西の京」は興隆を極め、民家もおよそ一万戸を越え、堺・博多と肩を並べ西国一の賑わいを誇っていたと言われている。

その後毛利元就に統治される事になるが、やがて関ヶ原の戦いに敗れ、防長2州に封じ込められ、藩庁も萩へ移される事になる。山口市が再び表舞台に登場するのは幕末で、13代藩主・敬親による藩庁の再移転からであった。そして維新以降の変遷を経たが、山陽本線という大動脈から離れてしまったため、結果的に昭和の戦災を免れ、静かな佇まいを残す事になる。

2. 大殿・一の坂川界隈

その中で今でも落ち着いた町並みや風情を感じるのが、市中心部を流れる一の坂川とその周辺に大路小路をめぐらす大殿（おおどの）地区である。

その名の示す通り大内氏館跡を軸に縦・横に交

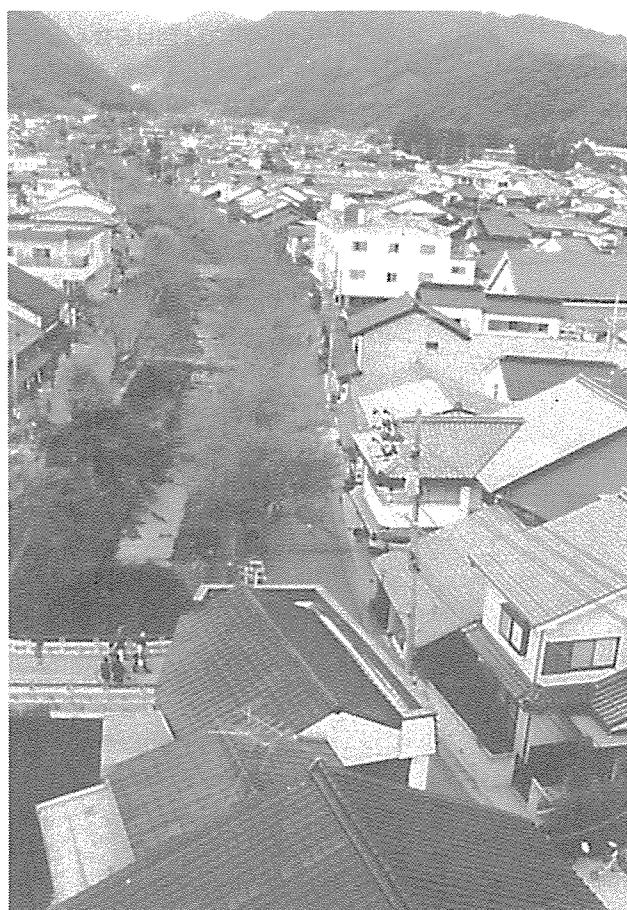
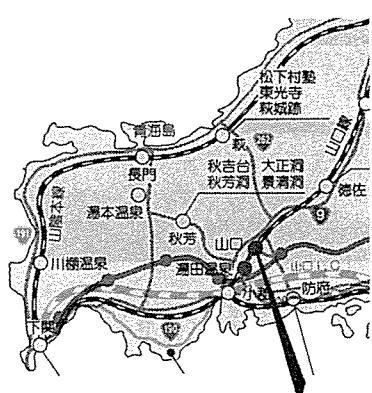
叉する町筋は歴史を語り、堅小路（後の萩往還）と並行する一の坂川は京洛憧憬の想いのもと、賀茂川に喩えられたともいわれている。

親水性のある現在の川は約30年前、治水工事が施された結果であり、当時としては珍しく景観上の議論が住民となされ、ホタル護岸や桜並木の保護など様々な工夫のもとに風情が保たれている。その河畔は桜・ツツジ・螢・紫陽花・夏の木陰・セピア・雪と四季折々に姿を変え、私達の心を和ませてくれている。

少し上流に位置する国宝・瑠璃光寺五重塔は大内文化の粹をなす建築物だが、両岸から遠くに見られたその姿を建物の陰に探すようになった今、この町にも時代の波がやって来ている事をあらためて感じる。人の歩くテンポや手の届く様な親しみの中で感じる事が出来た界隈の良さが、見失われがちである。

3. 通り沿いの風景の変遷

川における成果を目の前にしながら、トオリやその周辺への思いやりは置き去りにされた感はある。例えば、國体を迎えるためにつくられた旧国道も、今では交通量の少ない大きいだけの県道となり町のつながりを分断している。又、町の賑わいを町屋の連続によりかろうじて残す堅小路でも旧国道につながる都市計画道路の線引きが残り、建て替えも後退を余儀なくされるなど、新たな風情を町並みに生かす途は与えられていない。



周りを山に囲まれたまちの風景

今も残る裏露地は車社会に汚染されていない人間的な空間でもあるが、4点の接道基準を満たせぬ場所は若い世代への新陳代謝を拒み、オモテでも跡取りが帰ってこない家は屋敷が駐車場に替わって生き延び、連続性のない町筋と、車優先の生活を皮肉にも助長させている。

その時点では未来を睨んだものでも、この町自体のペースや伝えたい魅力、方向性を後回しにしたようだ。しかし幸いというべきか、経済成長の大きな波にさらされなかったこの町は原風景の記憶を失っておらず、生活に密着した店や人のふれあいと共に、忘れてはならないヒューマンなスケールを比較的多く保っている。

逆に考えればそれは取り残されたのではなく、他にない選択肢をたくさん持っているという事である。今こそ何が大切なかを把握し、生活感溢れる町の賑わいを考える時であろう。

4. 景観形成地区と市民の活動

近年、行政も悩みながら一の坂周辺に景観形成地区を指定し、ここに残る風情の保護と共に、生活の息づく町並みの整備に向けて積極的支援を試みはじめ、一方民間では96年に始まった『アートふる山口』という秋を彩る催しが好評を博している。

これは“一の坂・大路小路を遊ぶ”というテーマのもと、地域の民家を「小さな美術館」に見立て、ちょっと懐かしいものや作品で家先を飾り、高校生のガイド達が案内するなど、世代・団体を越えた想いで町をつなぐといった試みである。

今年で4回目を数え、実行委員会も継続を目標にまちづくりを願う各団体の合議制に形を変え、企画運営など既に準備が進められている。衰退が心配される中心商店街や湯田温泉など、市内他地区にとっても心のよりどころとなりうるこの地の

可能性が理解されつつあるからとも言える。

そのコンセプトも“未来へつなぐ、地域の個性を活かす、手作り”と、多くの市民が同じ活動を通して、町の今後を実際に動いてみて考える目的を持つ。

5. 市民による界隈の摸索

「アート」という冠は一見難しい様であるが古き良きものを懐かしむだけではなく、伝承や再生、新たな時代への創造力など様々な視点でこの町を飾ってみようという事である。

普段は閉ざされた町屋を開放し我が家の宝物を紹介するご老人、熱心に聞き入る家族連れ、橋の欄干にかかる織物・川辺で歌う学生、一生懸命案内する高校生、訪れた人々が界隈をゆっくり楽しむ、まさにこの町全体が模索する方向が形になる日といつても過言であるまい。

普段着で存在する様々な時代の建築物も、町の記憶として単に景観保全だけで封じ込めるのではなく、界隈の賑わいや風景が生きて継承されていかない。古き時代の良さを知りながら新しい想いと融合させる試みが、これから世代に、本当に大切にする心とチャレンジの場を与える。この町が保ってきた風景を、さらに多くのふれあいで語りつなぐ日が、今年は10月2・3日（土・日）である。

自分自身、町内に住み、このような活動に参画することで、宝物を発見することも多い。活性化への分岐点で悩みながらも育ちつつある元気、親しみやすいスケールを持った町の魅力を、この機会に外から見ての感想もいただきたい。

重要なのはその素晴らしさを地域全体で再認識し、まち全体の体力が残る今、何の要素をもってつないでいくのか、具体的な答を一つずつしていく事だと確信している。



一の坂川界隈



去年の“アートふる山口”一の坂川

ドイツにみる21世紀の都市計画の潮流

林 英光

HAYASHI HIDEAKI

愛知県立芸術大学

(1) 統一から「混在」のデザインへ
ドイツの美しく統一的、かつエコロジカルな国づくりは周知の事実だが、さらに今私の興味は都市環境づくりの「混合、混在」の計画がドイツ全土で進められていることである。

昨年の九月、名古屋にある地域問題研究所主催の海外研修に参加し、地球環境問題と東西ドイツの統一がもたらした、実に説得力のある現場を目の当たりにした。

シュツツガルトとチュービンゲンの都市計画局を訪問し、着々と進められている21世紀計画を見ることが出来た。私は海外の事情を引き合いに、我が国を語るのを好まないが、今回は、あまりにも新鮮な事例に出会い、しかも日本の現状と将来の大人である子供達の未来を語るうえで欠かせない都市環境への取り組みの大切さを伝えたいと思う。

それは、二十世紀の都市づくりの反省と、東西ドイツの統一によりドイツ全土に点在する駐留軍の撤退した跡地利用がきっかけとなった。二十世紀の都市計画は機能分離型であり、人々は複合的であるべき従来の都市の機能から切り離され生活することを強いられた。例えば、居住区だけのコンクリートで出来た集合団地は、人格形成上様々な問題があるといわれる。ドイツでは若者がネオナチを選ぶ根になったと言われ、我が国の神戸の少年Aの事件で、こぎれいで単調な郊外の住宅地にも同じようなことがいわれている。

都市は本来、政治、宗教、商工業、住居、職住がなどが混在し、子供の時から親の働く

く姿を見、様々な職業や人間模様から暮らしの知恵を学ぶことが出来たものであった。今ドイツ各地で始まった「混合、混在」のアイデアは、軍の跡地を取り込み、都市計画を媒体として、福祉、失業、教育など、人びとの日常の暮らし全般に影響を及ぼし、「良きに従い、悪しきは改める」理想に近付く方法であると市の都市計画の担当者は主張する。

しかしこの混在はそれぞれ都市によってそのコンセプトも取り組み方も異なり、中でもネッカー川沿いの小都市チュービンゲンで衝撃的の現場を見ることになった。

(2) シュツツガルトの取り組み

シュツツガルトは、すでに周知のように緑のシステム「風の道」による持続可能な都市づくりに取り組むと同時に、I.C.E、T.G.V高速鉄道によるパリ、ブダペスト間を結ぶ全ヨーロッパ的視点での三世代プロジェクトに取り組んでいる。ドイツでは100万人を超えると都市ではないと言われるそうで、バーデンビュルテンベルク州都であるこの街も57万人と適切な規模であるという。「持続可能な都市」づくりでは、2005年までに都心部の計画に重点を置き、職住混在のため法律の変更を進め、土地利用を混在させようとしている。そのことは一時世界中ではやった郊外の人工都市はつくらず、都市の内部に目を向け、空洞化しつつある都心の昼夜のアンバランスをなくし、人の目の届く安全な空間にするためだと言う。

また「街と自然の共存」では、歩いて「5



シュツツガルトの風の通る建物群

分の緑地」の整備、自然保護法による自然の質のランクづけと、自然を元に戻したり埋め合わせするミティゲーションと、家屋の緑化をすすめている。2010年までには地域の全体像を把握し、都市周辺農耕地の建物、温室などをも制限し、都市住民のためのリラックス用の優しい空間にしようとしている。当然農民の猛烈な反対を説得しながらである。

我が国に立戻ってみると、一応「整備」されつつある都心部もそうだが、都市周辺部は本当に惨憺たる状況のまま混沌としている。こんな環境を原風景として育つ子供たちに未来はあるだろうか。

ドイツの埋め合わせ法で重要視している、「美しい眺め」、「リラックス」、「動植物」、「地域気候」、「水」、「土壤」、。。。。。

我が国にもそれらを大切であるという意識はあるが、本氣で取り戻そうとするビジョンもその術もなく、50年を経た同じ敗戦国とは思いたくないところまで大きく格差ができている。またバブルの崩壊を理由に、やっと築き上げてきた環境づくりを止めてはならないと思う反面、全く方向転換し、この混沌を秩序と調和の美しい混在にかえて行けるチャンスかも知れないと思う。混沌はアジアが本場であるが、新しい「混在」は、新たなヴィジョンと方策で意外にも簡単に身近なものになるかも知れない。

(3) チュービンゲン市の「混在」の取り組み

チュービンゲンはハイデルベルグと並ぶ中世以来の大学都市で、この小さな美しい都市から、ケプラー、ヘーゲル、メリケ、ヘッセ等多くの人材が輩出し世界の原理を探究し、哲学、文学をはじめ、ドイツの精神史に大きな足跡を残した所であるという。旧市街は狭い坂道と古風な家並みに囲まれ、都市の持るべき本来の様々な表情に満ち溢れている。たった7万5千人のこの街から、新たな21世紀への実験が始まっていた。ここで私達はこの街在住の大川温子さんの案内で、市の再開発事務所と工事進行中の建設現場、そして小さな幼稚園を見る事が出来た。再開発の現場は旧市街とネッカー川を鉄んで10分ほど歩いた所にあり、1990年東西ドイツ統一により駐留軍の撤退した全長2キロに及ぶ軍の跡地である。ここでの「混在」による再開発のコンセプトは、以前ここの都市局長であったフルトケラー氏の著書「機能を剥ぎ取られた都市」、副題一公共の広場の破壊に対抗してーが元だと言う。「ウルバニテート」

、つまり失われた都市の機能の回復である。その5原則を要約すると次のようになる。

1. 商、工、住の混在

都市機能の切り離しへの反省と同時に、車利用をやめ、交通システムを見直し、地区的時間帯の活発化の偏りを緩和し、地区内でも常に都市のメリットを味わえる。建物の一階は店や仕事場とし、道から子供達も大人の働く姿を見て育つ。食住近接は車を住区から閉め出せる。身障者は一階に住むことができ、パーキングもある。技術の発達は工場などの騒音悪臭などを解決できる。

2. 密度

エコロジー的素材をできるだけ用い、バラバラな都市機能を集め効率的に使い尽くす。弱者のための密度を高め、子供や老人が動き易い空間にする。

3. 土地の細分化と自由なデザイン

従来の大ブロックでの販売をせず外から見て中が何か、何をしているのかが分かる様にする。建物の制限は前面の高さと1階を仕事、商売につかうこと。色彩や屋根の形は制限しない。従来の伝統様式にこだわらず各自が自由に表現し、魅力的で変化のある都市景観をつくる。

4. 公共の場所

家の建っているところ以外は人びとのふれあいの場に。車は本来無くて良いものであるから、家の前は自分の車を置く場所としない。身障者と、買い物の時はO.K. 有料パーキングに集約する。公共の場は住民が皆で考えてつくる。

5. 文化的、社会的インフラづくり

例えば仏軍戦車修理工場を改修し、当初はすぐに必要となる地域の集会所・ダンス練習場に、数年後には午前は小学校のスポーツに、午後はダンス学校に、時には結婚式場に貸し、費用は学校と市が補助するなど、段階的なプログラムを組み、新しい地域に都市の暮らしのメリットを築きあげていく。

この再開発の特徴に、できるだけあるものは壊さず再利用する方針がある。百年前の建物や兵舎を改修し学生寮、低所得者、生活保護者用とし、馬小屋までグループや個人、アーチストに安く売り、自前で工事をさせ自由な表現をさせている。また二十数人による共同の計画をまとめ、一階に商工業者を誘致させ、互いがスペースを出し合い、プールとフィットネスクラブをつくり、地域にも解放するコーポラティブハウスが完成しつつあった。

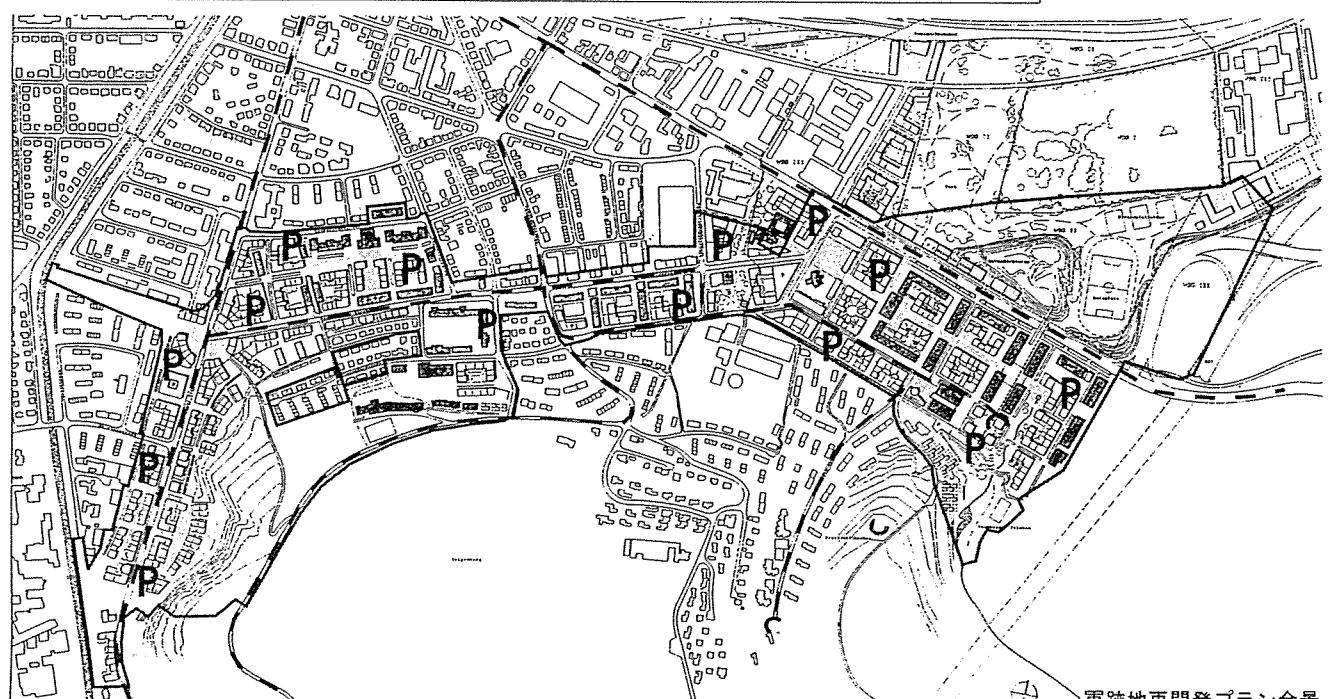
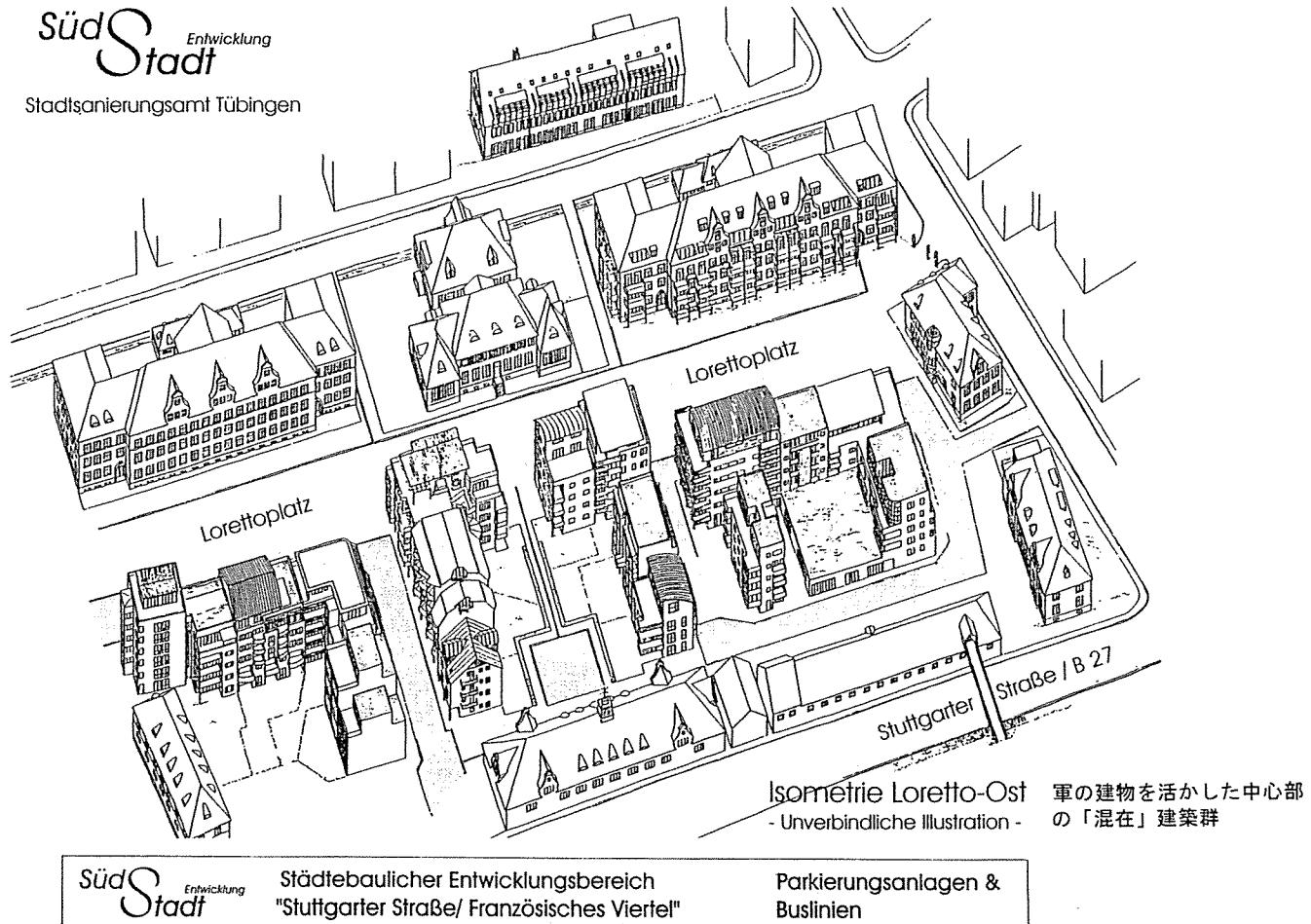
極め付きは、数軒の続きの家を一人の建築家が設計し、形や色彩をも異なったデザインとしたが、担当者はティストが同じでよ

くないと言い、二度とこんなことはさせないと思卷いていた。この一言にも、大きく我が国との次元の違いを感じさせられた。「混在」は単なるお題目ではなく、厄介視される人々、浮浪者、犬を連れ人にけしかけ金をとるパンクの若者、この街だけでも100台にのぼる移動車暮らしの人々にも土地を貸し与えている。この人達も都市の要素であり、人は幼い時から人生の裏表を見て育つ必要があるという。省エネルギー、

エコロジーそして人間本来の生き方の回復を都市計画により、すこしでも理想に近づくことをめざす環境づくりある。説明してくれた建築家、都市計画のジャーナリストで広報担当のズールケ氏はカッセルに住み各地を走り回っている。ドイツでは最も現場に近い最前線の役所の担当者が誇りを持ち、かなり自由かつ柔軟に裁量しているようだ。

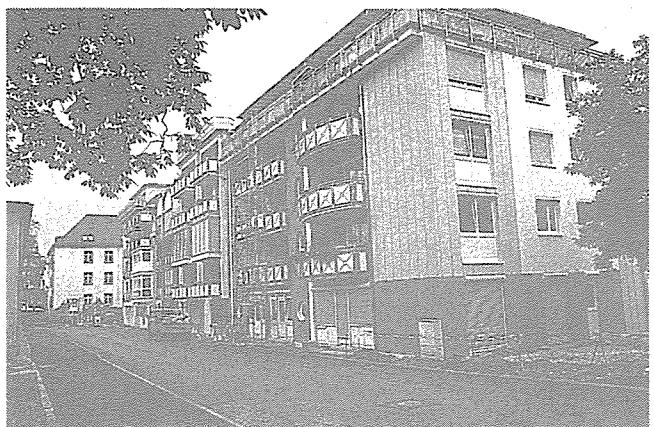
SüdStadt
Entwicklung

Stadtanierungsamt Tübingen

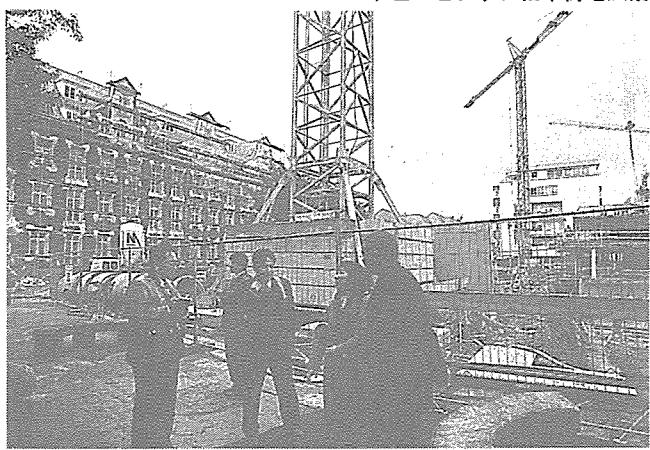




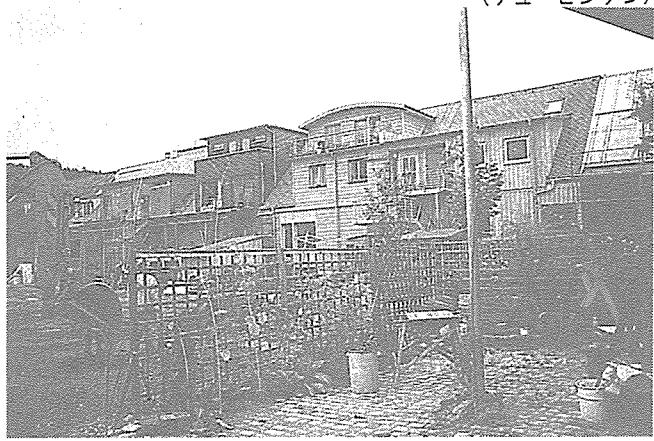
チュービンゲン旧市街地風景



一人の建築家が設計したテイストが似通った不評な建物
(チュービンゲン)



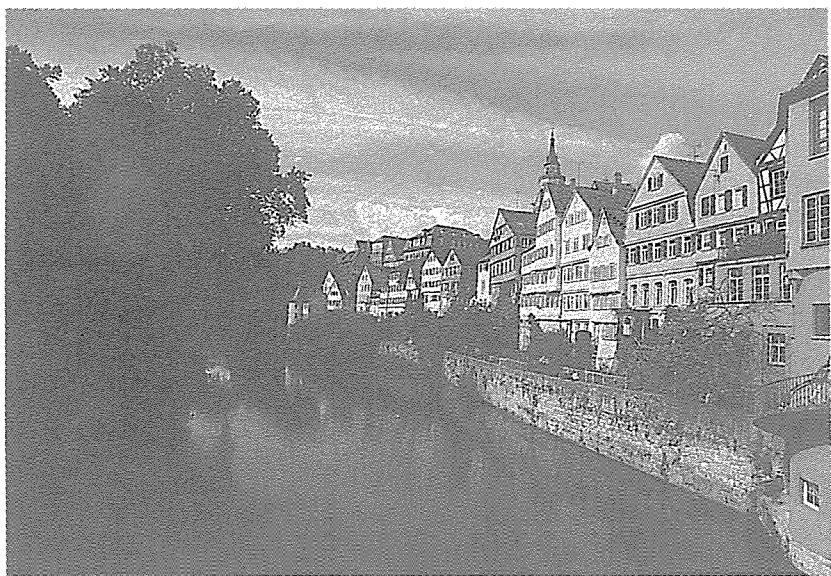
再開発現場・兵舎の改修 (チュービンゲン)



アーティスト・低所得者達の馬小屋の改築 (チュービンゲン)



混在の再開発現場 (チュービンゲン)



ネッカーフリ沿いの旧市街地 (チュービンゲン)



共同使用システムの車と駐車位置(チュービンゲン)

(4) 幼稚園でみたもの

最後にキンダーハウスウエストシュタットについて少し説明したい。この小さな幼稚園は25人二クラスで、エネルギーコストを下げるため、エネルギー省の助言を受け、日本でも知られた二人の建築家に依頼したものであるという。P.V.C.、トロピカル木材、フロンを含む材料を使用しないこと。主にコンクリート、鉄骨、この地方産の木材、ペアガラスを用い、断熱材は古紙のチップを風圧で吹き込み、建物は南面を広く開き暖房効果を上げている。室内温度を20度Cに保つようドアや窓の開閉まで指導している。ドイツではガス、重油、地域暖房が主で、エネルギーコストのかかる冷房はしない方針であるという。

ここで奇異に感じたのは、数歳年令の異なる子供たちが、午後のひととき保父、保母と遊んだり静かに集っていることだった。見学のあと緑の溢れる近自然工法らしき小川沿いに、草花やりんご、民家の裏庭を眺めながらヒューマンスケールの優しい中世の旧市街に辿りついた。

最近大学で幼稚園児のための遊具の課題を

出し、いつもお世話になっている幼稚園へ学生達と見学に行った。そこでその賑やかさ、いや喧しさ、目まぐるしさ、子供達の落ち着きのなさは、数年前と比べてもひどくなっていることに驚いた。この子達を統率できる若い保母さんに畏敬の念を抱いたが、それ以上に子供達の家のテレビの騒音が想像できた。森に埋もれた環境の差を、そして子供達の未来を見たような気がした。今、我が国で起きている小学校の学級崩壊に都市環境が大きく関与していると私は思う。

人が環境をつくり、環境が未来の人間をつくる。都市は人生を学ぶ最も大きな教育現場であり、大多数の人々がそこで生を受け人生を終える。もしもその都市環境が魅力に富み、住む人々に誇りを持てるものであったとしたら、そこから政治も経済も文化も語るに値するだろう。我々日本人には都市環境、都市計画は専門家のビジネスとしては存在するが、三世代後の人間の問題にはなっていない。JUDIの今後取り組むべき大きな課題である。



キンダーハウスウエストシュタット幼稚園の南庭面



年齢差のある子供たちの遊ぶ風景（同幼稚園にて）



キンダーハウス（チュービンゲン）



キンダーハウス（チュービンゲン）

■事業委員会報告

中野 恒明
NAKANO TSUNEAKI
事業委員長
株アブル総合計画事務所

1) 総会時開催イベントのお知らせ
(7月17日午後)

(1) 1999/第2回JUDI次世代都市デザイン・パネルディスカッション (13:30~15:30)

わが国の戦後の都市計画が経済の高度成長を目的とし、全国等しく都市基盤水準の向上を目標として事業を行ってきた結果、・・・・?

そこでいくつかのブロックの都市デザインガイドブックを編集・執筆していただく方々に、編集活動を通じて読みとった地域の都市の特色とこれから展望を語っていただき、総会に集まる会員の方々とのディスカッションを通じて、個性ある地方都市のデザインを中心とした可能性や努力目標の共有化に役に立つひとときを過ごしたいと思います。

パネリスト候補：北海道ブロック、東北ブロック、関西ブロック、九州ブロック、北陸ブロック（コーディネーター）
会員の皆さんへの期待、発言を期待します。

(担当:南條道昌、西沢健)

(2) 都市環境デザイン・モニターメッセ

(15:45~18:45)

総会開催時の恒例イベントと定着した感のあるモニターメッセ、今年は、新規技術および製品発表（20分）と、以前発表された製品等のその後=レビュー（10分）の2通りの発表枠を設けました。厳しい時節がらにもかかわらず10社余りの参加申し込みを得ております。意欲のある企業さんの意気込みが伝わるはずです。請うご期待を！

(担当:井上正良、中野恒明)

(3) 懇親会 (19:00~20:30)

今年は、第一ホテル・シーフォート28F/トップオブザベイに会場を移しました。恒例の会員相互、モニターメッセ参加企業の方々との交流、懇親の場です。地方のブロ

ック間交流の機会ともなっております。今年は会場の都合で少し遅い時間となりました。ご了承願います。（担当：同上）

2) 都市環境デザインガイドの雑誌
「造景」への連載の件

雑誌「造景」（建築資料研究社）の連載の準備が着々と進んでいます。雑誌編集者との打ち合せで前号にお知らせした内容に変更が生じましたので報告します。あわせて進捗状況をお知らせします。

- (1) 雑誌「造景」の年6回の毎号連載（当初は年3回でしたが、連載となりました）。
- (2) 各号8頁程度とするが、内容によっては増減もあり。
- (3) 原則としてオールカラー版。
- (4) 全国ブロックの掲載に24回程度、4年近くは要する。
- (5) その後単行本として加筆修正、再編集となる。

ちなみに関西ブロックの原稿は6月には完了、9月15日発売号を皮切りに4回に分けて掲載の予定。

関西ブロックの対象界隈と責任編集体制は次のとおりです。

- ・京都/下京-田端修（編集責任者）/材野博、清水泰弘、西斗志夫、加茂みどり、道家駿太郎
- ・奈良/奈良-鳴海邦穂、丸茂弘幸、（責任編集者）/土橋正彦、三井田康記、久保光弘
- ・阪神間/武庫-江川直樹、井口勝文（編集責任者）/小浦久子、角野幸博、三宅正弘
- ・大阪/天王寺-佐々木葉二（編集責任者）+天王寺研究会

北海道、四国ブロックも掲載準備中で、続いて東北、北陸、九州、中国、中部、関東ブロックと移行（順番は編集委員会にて決定）して行きます。

■広報・出版委員会活動報告

吉田 慎悟
YOSHIDA SHINGO
代表幹事
株カラープランニングセンター

口来期のテーマは「地場産業」

“JUDI NEWS”は今号で48号となりました。今期は特集テーマとして「小京都」「港町」「下町」など、演歌の歌詞に出てきそうな場所を扱ってきましたが、49号となる来期からは年間の特集テーマとして地場産業と都市環境デザインを取り上げる予定です。酒、醤油、味噌などの「醸造の蔵が残るまち」や、「陶磁器を生産するまち」、「石材を産出するまち」などを取り上げ、地場産業と都市環境デザインの関係を探つ

ていきたいと考えています。

口年鑑発行に向けて

今期、広報・出版委員会では“都市環境デザイン・年鑑”発行の準備を進めてきました。“JUDI NEWS”に掲載された記事を内容別に整理・分類し、“都市環境デザイン・年鑑”的な構成をしました。“JUDI NEWS”的記事は項目別に再編集することによって、また新たな視点に発展すると考えています。会員の皆さまには“年鑑”的な発

行にあたって、以前“JUDI NEWS”に執筆した内容に加筆、あるいは新たな原稿の執筆をお願いすることもあると思いますが、その際にはよろしくお願ひ致します。

□会員増強のお願い

来期、広報・出版委員会は、定期的に発行している“JUDI NEWS”に加え、“都市環境デザイン・年鑑”的発行を計画しています。この“JUDI NEWS”や“都市環境デザイン・年鑑”的内容をさらに充実させるために、編集スタッフを増強を計画しています。このような編集作業に興味をお持ちの方は是非広報・出版委員会にご参加下さい。

□“JUDI NEWS”名称変更を検討

都市環境デザイン会議では現在Eメールによる通信の整備やホームページの開設の準備が進めていますが、会員に迅速に伝えたニュースは今後このようなデジタル通信を利用することが考えられます。このような時代に対応し“JUDI NEWS”的名称を変更をすることが代表幹事会より提案されました。“JUDI NEWS”は既にニュースばかりではなく、年間の特集テーマを設定し都市デザインに対する評論や作品も多く掲載するようになっています。このような内容にふさわしい名称を会員から募集することを検討しています。

■四国ブロック例会レポート

■四国ブロック

白石 高啓
SHIRAI SHI TAKAHIRO
四国ブロック幹事

ゆにて設計事務所

◇四国ブロック総会 開催 6月5日（土）
10:00a.m.～12:00 於：高知工科大学



写真1－高知工科大学キャンパス

1998年活動報告と収支報告及び1999年活動計画と予算計画が承認され、引き続き

「造景」の編集方針について出席者15名全員が多様な提案、イメージ等を語った。

四国のテーマは「癒し」に異存はないが「癒しコンセプト」を共通言語にするためにもばひろく意見を交わす場をもち、四国の土俵きっちとしておくこと。又編集委員長林茂樹会員を中心に各4県の編集委員と連携させながら充実した内容を構築する。

「これを機会に見えなかった四国が発見できるかもしれない」と期待と前向きの発言が多かったので今後が楽しみ。この日、入会希望者が2名もあり幸先の良い第9期スタートとなった。

◇四国風土再発見＊環境デザイン紀行IN高知「近代土木遺産を考える」13:30～15:30

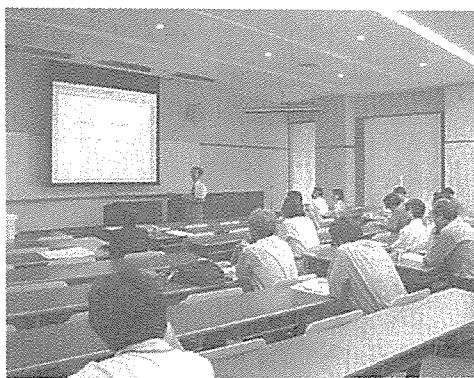


写真2－「環境デザイン紀行IN高知」会場風景

環境デザイン紀行も四国4県巡回は高知が最終回となり、ある程度の満足感と四国風土の濃密さを再認識させられた。会場には「高知の近代土木遺産」のパネルが展示されていたが、四国四県に密接に関連した土木遺産の印象だった。重山陽一郎会員（高知工科大）が高知県夜須町「手結港」（野中兼山の日本初・堀込型港湾）＜写真－3＞の復元工事により、生活の賑わいが持続する漁港環境整備及び、「はりまや橋」の再生とイメージ活用について坊さん簪の歴史的新事実を織り交ぜながら語った。又、朱塗りの欄干は歴史的事実は無く新たな観光戦略から生まれてきたことも分かった。その後蘿朝幸助教授の司会でフリートーキングに移り、「土木遺産の生きる街づくり、遺産の知恵の生かした技術の見直し及び歴史的意義、高知に多く残る沈下橋の活用、現代の土木の安易な標準仕様頼りからの脱却、保存地区などの橋の欄干のストレートなデザインモチーフの低俗趣味、土木デザイナーの匿名性」等と忌憚のない声が聞けた。結論として、JUDI四国ブロックの実力と高知工科大学・社会システム工学科の人材養成に期待しながら環境デザイン的土壤を涵養してゆくことに落ち着いた。

「土木の世界は今、ようやくルネッサンスの時代を迎えている」と重山会員の言葉が印象に残った。



写真3－手結港

■関西ブロック

長谷川 弘直

HASEGAWA HIRONAO

関西ブロック幹事

㈱都市環境計画研究所

●関西ブロックは、例年、月1回のペースで10回のセミナーを開催している。その中で会員外や学生などにも積極的に呼びかけ、他ブロックとの共同開催や海外交流セミナーなども行われていて好評である。

●第1回セミナーは2月19日（金）ドーンセンターにおいて、テーマ：「新アテネ憲章1998について」

講 師：鳴海邦碩（大阪大学）

コメンテーター：丸茂弘幸（関西大学）で行われた。

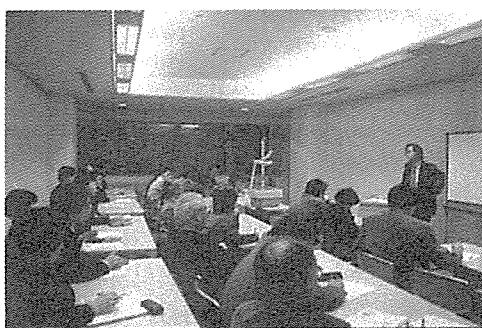
参加者の全員が各自ひとつのコメントを提言し、それに講師とコメンテーターが解答するという形式で白熱したセミナーとなつた。

●第2回セミナーは3月12日（金）ドーンセンターにおいて、

テーマ：「ルーフスケープ（屋根並）について」

問題提起：シレーナ・カナシロ&鳴海邦碩（大阪大学）

コメンテーター：江川直樹・千葉桂司で行われた。屋根が重要なランドマークである。日本人がどのように屋根景観をとらえているかを分析し、中高建築にふさわしく、かつ日本的な屋根とはについてミレーナさんの問題提起が興味深いテーマとして議論展開された。



第2回セミナー会場風景

●第3回セミナーは4月16日（金）エル大阪において、

テーマ：「民俗地理学から都市を語る」

問題提起：森栗茂一（大阪外国语大学）

コメンテーター：伊藤通生（大阪大学）

小浦久子（大阪大学）で行われた。

●第4回セミナーは5月15日（土）中央電気俱楽部214会議室において、

テーマ：「パブリックを問う（1）」

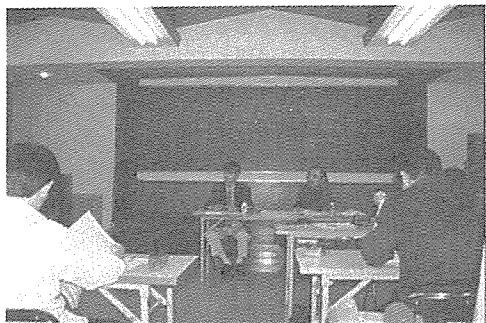
?個から全体?

問題提起：三谷徹（県立滋賀大学助教授／ランドスケープアーキテクト・オフィサル設計事務所）

コーディネーター：佐々木葉二（鳳コンサルタント／ランドスケープアーキテクト）で行われた。

パブリックにおける個人と社会（全体）との係わりやそのデザイン表現のありかたについて、若手ランドスケープデザイナーとして活躍されている三谷さんの作品事例を中心に問題提起され、佐々木さんが問い合わせながらフロアからの意見をくみ取り、2人で解答する形態で行われた。

今回は40名近い学生の参加があり、若さあふれる熱気でいつものセミナーとは一味違った。年明けに「パブリックを問う（2）」のセミナーが企画されている。



第4回セミナー会場風景

●第5回セミナーは6月18日（金）ドーンセンターにおいて、

テーマ：「色里の消滅？近代恋愛と都市？」
都市は舞台

講 師：98年第20回サントリー学芸賞を受賞された佐伯順子氏（帝塚山学院大学助教授）

コメンテーター：井口勝文（竹中工務店）
丸茂弘幸（関西大学）で行われる。

●関西・四国ブロック共催セミナー in 高知が8月11日（木）、12日（金）

テーマ：「中心市街地活性化への対応」
サブテーマ：「よさこい祭り／高知」に参加
オプション：「阿波踊り／徳島」に参加で行われる。

・8月12日（木）のセミナーは「高知共済会館3F」でAM9:00～ 基調講演

講 師：長澤昭「㈱高知県商品計画機構 代表取締役（前）大丸百貨店専務」
コーディネーター：大谷英人（高知工科大学）
パネラー：西謙二（高知市産業振興部）

島博司（集環境計画）

鳴海邦碩（大阪大学）

有光友興（環境開発研究所）

・セミナー参加費：会員1000円／人
非会員1500円／人

・申込み問い合わせ：有光友興（（株）環境開発研究所）
TEL:06-6252-2507
FAX:06-6251-6246

■関東ブロック

【例会担当】

永松 明子
NAGAMATSU AKIKO
関東ブロック運営委員
㈱INAX

【記録担当】

須永 優子
SUNAGA YOSHIKO
関東ブロック運営委員
㈱TALO都市企画

■北関東の都市環境デザインを訪ねて 小京都・小江戸の魅力をあわせ持つ蔵の街 “栃木”視察会

平成11年3月13日（土）、関東ブロックでは関東新発見シリーズの第1段として、「小京都・小江戸の魅力をあわせ持つ蔵の街“栃木”観察会」を実施しました。

■街づくりの実際を歩きながら見る

栃木市では、栃木駅前の再開発事業を進めつつあります。そして街の中心部には、かつて見世（店）蔵が並んでいた大通りがあり、市ではここを現存する蔵や明治・大正期の建物を生かした「歴史的街並み景観形成地区」に指定し、旧中心地の再生をはかっています。市内には、京都から公家たちが日光へ詣でた例弊使街道と、江戸と舟運で結びついていた巴波川が通り、街並みにはこうした歴史も残されています。栃木市がどんな街づくりに取り組んできたかを勉強しようということが今回の狙いででした。

栃木駅に集合した約30名が午後1時半から出発し、市内の建物や街づくりの仕組みについて、実例を見ながら市職員や観光ボランティアから説明を受けました。街並みに合わせて外壁の色彩や塔屋の形状を配慮したマンション、例弊使街道、見世蔵を隠していた増築部分をはずして街並みを再現した五棟商家、大正建築の旧中原証券、レストコーナーのポケットパークなどが街中にうまく配置されていました。巴波川沿いを歩くと、明治33年建築の旧横山銀行と麻屋、明治42年建築の麻蔵、巴波川につながる昔は県庁があった堀の脇には、大正10年建築の旧栃木町役場などがありました。それぞれの建物が、昔の佇まいを彷彿とさせています。

街並みの整備により、現在栃木市を訪れる観光客は年間30万人弱に増えたとのこと。市は潤っているかとの質問に、市職員は

200万人は来て欲しいと少し残念そうに答えてくれました。

■盛り上がった討論会

午後3時からは、栃木市第4地区コミュニティセンター会議室で、栃木市の街づくりにかかわった方々と都市環境デザイン会議のメンバーの討論会を開催しました。

<5人のコメンテーターからの話題提供>

最初に、作山康氏（㈱都市環境研究所）をコーディネーターとして、永井護氏（宇都宮大学工学部教授）、河東義之氏（小山工業高等専門学校教授）阿部佳司氏（栃木蔵の会事務局長）、山崎隆司氏（栃木市役所都市計画課副主幹）鄭隆成氏（㈱都市総合計画）の5人の方から話題の提供を得ました。

最初の話題提供者永井氏によると、栃木市の取り組んできた街づくりの経緯は3段階に分けて考えられるとのこと。第1段階は、平成元年に「誇れるまちづくり事業」を導入しその後の計画を策定したこと、第2段階は、当時、アーケードで蔵が見えない状態だったため1年かけてアーケードをはずしたこと、第3段階は、平成2年からシンボルロード事業として、歩道の幅員拡幅、電線の地中化、祭りのための広場設置、沿道建物の修景ガイドラインを設けて助成や融資を行ってきたことなどだそうです。道路事業はアーケードをはずすための踏み絵だったと締めくされました。

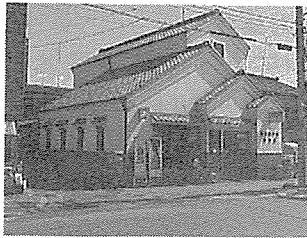
河東氏は、昭和56年から栃木市の街づくりにかかわってこられました。当時「やすらぎの栃木路キャンペーン」として何軒かの商家の見世蔵を公開し、昭和60年からは、市内の蔵の本格的調査を実施しました。日本の蔵の歴史は奈良時代に遡るようですが、土蔵となるのは中世からで、黒漆喰の見世蔵は大火の多かった江戸特有のものだそうです。それが川越や佐原など江戸周辺に広がり、栃木にも幕末の頃に伝わりました。その後の大でその効果が実証されるほど、通常の建築に比べて費用が5倍かかるにもかかわらず、かなりのスピードで増え



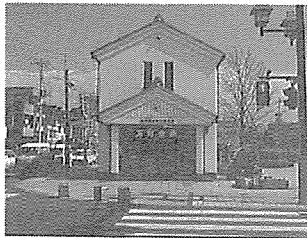
ディスカッション風景



観光ボランティアの齊藤氏の説明を聞く参加者



郵便局



交番



公衆便所



公衆電話



看板も蔵づくりに合わせるようになりつつある



これでもか！蔵風自動販売機

たそうです。現在も初期のものが3棟が残り、明治期の街並み景観を特徴づけているとのこと。大正時代には洋館を建てる風潮となり、これも街並みに彩を添えることとなりました。これらの建物を生かすことで街に活気を呼び込み、栃木商人の自信を取り戻すことが、「誇れるまちづくり事業」のねらいだったそうです。

外側を残せば中の使い方は所有者の自由といつても、使い勝手から取り壊され新しい建物に変わっているケースも多いのが実情です。これは、この修景ガイドラインは要綱であり、罰則がないためではないかと河東氏。保全するために巴波川沿いの麻藏を登録文化財に指定したそうですが、こうした歴史的な街並みをもっと広範囲に拡大し、景観の奥行きを作ることが課題だとのことでした。

大通りで店を経営している阿部氏は、平成2年に組織された「栃木蔵の会」に参加されています。そこで気づいたのが、地域の人たちがあまりにも自分の街を知らない、興味を持たないということでした。そこで、仲間たちと、自分の街だけでなく各地の街づくりについて勉強するようになったそうです。栃木の歴史についても勉強し、昔は城内町に小山一族の皆川氏の城があったことや巴波川沿いが日光の荷揚げ場で御用河岸と例弊使街道とで栄えたこと、周辺に下野の国府があったこと、平安時代に太平山の桜並木ができたこと、栃木は東山道との関係で山沿いから開けたことなどを学びました。また、街に付加価値をつけるために、栃木市を「小京都」だけでなく「小江戸」とも呼んでいます。舟運で栄えたこと、江戸型の祭りがあったこと、古い街並みがあることの3つが小江戸の要件だそうです。

蔵の街が残されているのは社会経済の進歩から取り残されたからですが、これらの活用を考えたことで、街並みがきれいになり商業も活性化してきました。また、みやげ物屋や飲食店を増やし、人形山車が市内を練り歩く栃木秋まつりなどのイベントを行うことでも観光客が増えたとのことです。

阿部氏たち商店会のメンバーは月1回集まりを3~4年続けたのですが、中心メンバーが同じではマンネリとなる可能性もあるため、市外の人にも加わってもらって、街の活性化を考えいくことにしました。将来は、使いにくい蔵の居住環境をどう整えるかも考えたいそうです。

山崎氏は行政の立場から、街づくりのしくみについて説明されました。

昭和63年に景観アップ、商業の活性化、居住環境のレベルアップ、交流の場の創出を

はかるといったことのため、栃木市の街づくりを「小江戸街づくり事業」に指定しました。30haの歴史的街並み景観のネットワークを整備するためです。大通り935mの間の修景については、補助も行いました。平成10年度末で58棟の蔵が修景の対象となり、補助金総額は1億6700万円にのぼりました。大正期の建物については改修費の3分の2、最高額300万円までを、昭和以降の建物については改修費の3分の1、最高額100万円までを補助しています。その際には色彩、高さ、看板の意匠や大きさについても街並みに合わせるように規制するようにしました。非歴史的な建造物についても、蔵の街に合わせて作ることにしています。内部の改装については、利率2.4%から2.8%で最高3000万円まで貸し付ける制度も設けました。その結果、景観整備の目的がほぼ達成され、観光客も増えていることです。これからは、条例化も検討すべき時期にきていると山崎氏。まず景観形成基本計画を策定することで、市民の理解を得ようとしているそうです。

最後の鄭氏は、蔵の街と駅前再開発の連動の必要性について語られました。蔵の街づくりは古いイメージがあるので、新しいインパクトも欲しいとのこと。おしきせでない都市のシンボルが必要であり、都市の骨格も重要なことでした。問題なのが現在乱立する看板、増えつつある駐車場、修景された街並みが路地裏や横町まで及んでいないこと、裏道のネットワークが未整備なこと、街の終着点が不明確なことなど。駐車場への転換で消えつつある路地もそうですが、大通りから路地裏へ人を引き込むために、喫茶店や呑み屋の配置やネットワーク化も必要ではとのことでした。

＜出された数々の意見や感想＞

話題提供後のデザイン会議メンバーとの討論会では、最初に中野氏が観光だけを目的に街づくりをするのではなく、市民が街に戻る効果を狙うべきとの考えを述べました。線的な街づくりでなくもっと面的に広げるべきで、街としての奥行きが欲しいとのことです。これに答えて阿部氏から、「宿」も企画していたこと、街にサービスが必要と考えていること、整備地区は商店主の年齢が高いので、中心部から外れた若い商店主の方が可能性があり、路地裏の出店もあり得るという意見が出されました。

土田氏からは、人と車の関係が整理されていないことが指摘されました。また川の水が汚れているという印象も語られました。商店の休日はいつかとの質問に、阿部氏からは以前は月曜日だったが最近はバラバラ

なこと、駅前は駐車場がないのでスーパーも撤退する予定であることなどの返答がありました。また、山崎氏からは、栃木市は地下水位が高く水が豊富だが、雨の少ない時期には水量が少なくなり汚れがちとの説明。巴波川は以前は全国の汚れた川の第2位と言われたそうですが、下水道の整備も行っているとのことでした。現在は草刈りや清掃も行い、だいぶんきれいになったそうです。今は、改修工事が行なわれている関係で汚れているのではないかとのことでした。

永井氏からは、施設来訪者が増えマスメディアのPR効果も上がって集客数も増えているが、車をどこまで入れてどこは禁止にするかなど、宿場街の方向性を議論することが必要との意見。

司波氏からは、水を街の軸にする事業を行っている四国の西上を例に、水を生き返らせて水の都になるという可能性もあるの

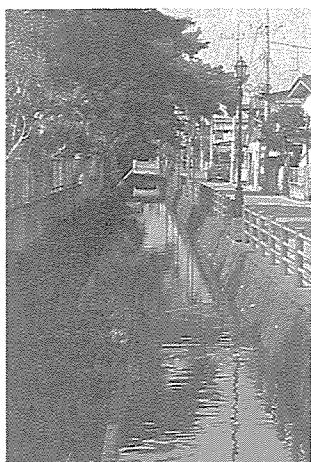
ではとの意見が出されました。

小浪氏からは、街は総合力なので栃木駅だけでなく、新栃木の駅も同時に開発して欲しいとの意見と、銀座4丁目の商店街についても、蔵と似合うような街並みに早く再開発して欲しいとの意見が出された。

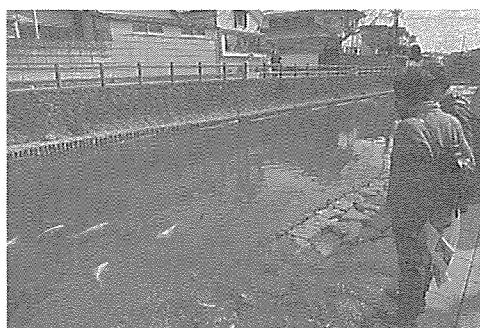
河東氏からは、街としてわかりにくいほうが魅力につながるという意見。いろんな要素があることが望ましいとのことです。車の乗り入れにも制限が必要ということをおっしゃっていました。

コーディネーターの作山氏からの名物の食べ物がないという意見には、阿部氏などから「しもつかれ」、「そば」があり、さらに「ジャガイモやきそば」などが今考えられているとの答えがありました。

以上多岐にわたる感想や意見が出され、盛り上がりを見せた今回の討論会は、予定どおり午後5時半に閉会となり、会場を移して市長参加の懇親会へと続きました。



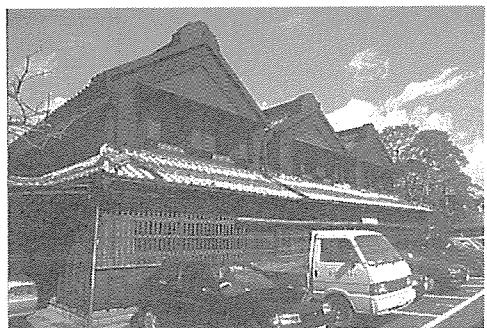
かつて県庁があつた県庁堀



10万匹を超える鯉が泳ぐ巴波川(うづまがわ)



タイヤショップも蔵づくり



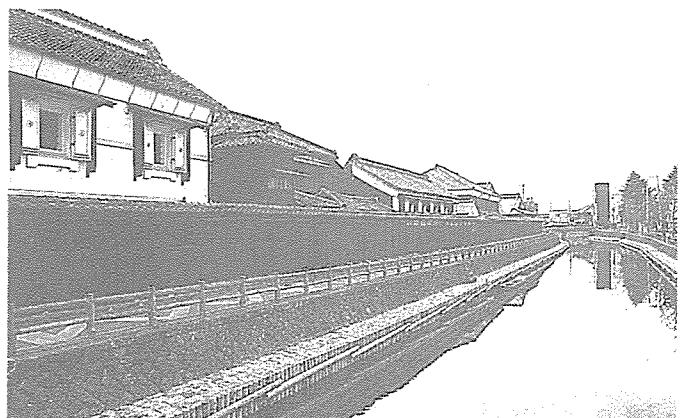
預金高県下一（日本一？）が豪華な蔵づくりに現れている



洋風建築物の栃木市役所別館



近年アーケードや面被りを取って昔の見世蔵が姿を現してきた



栃木の代表的な景観。巴波川沿いの黒板堀

事務局より

1. 新会員の紹介

1999年3月1日～4月30日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

4月30日現在の会員数は、532名です。

氏名	勤務先
松宮喜代勝	マツミヤアトリエ
水野 雅男	㈲水野雅男地域計画事務所
本田 寿	本田寿建築設計事務所
岡田 秀夫	日本軽金属㈱
菊地 隆介	日本軽金属㈱
水野 鮎子	㈲アイ・ユニティー
有賀 隆	名古屋大学大学院工学研究科

4. 第9期定期総会開催のお知らせ

日時：1999年7月17日（土）10時半
より

場所：東京都品川区天王洲アイル東京MIビル
総会後には、事業委員会主催のパネルディスカッションやモニターメッセ、懇親会が予定されていますので、是非ご出席下さい。

2. 退会者（1999年3月～4月）

飯嶋俊比古、小川三郎、佐藤涼一、佐野浩、
竹森公彦、長谷川智也、伴丈正志（敬称略）

3. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容（新）
伊藤 隆	㈱リヨーワ東京支店 〒101-0052 千代田区神田小川町2-6 -3 Tel. 03-3295-0471 Fax 03-3295-0470
井上 隆志	高知県総務部行政システム改革室 〒780-8570 高知市丸ノ内1-2-20 Tel. 0888-23-9601 Fax 0888-23-9918
岡 道也	(財)福岡都市科学研究所 Tel. 092-733-5686 Fax 092-733-5680
小澤 修	㈱マエダ四国事務所 〒780-0870 高知市本町4-1-8 Tel. 0888-71-3081 Fax 0888-71-3082
坂本 進	㈱TAKイーグルック 〒104-0033 東京都中央区新川1-24-1 Tel. 03-3551-9121 Fax 03-3551-4085
白井 治	㈱まち空間研究所 〒651-0093 神戸市中央区二宮町2- 6-18-501 Tel. 078-230-3031
難波 健	兵庫県まちづくり部都市計画課 Tel. 078-362-3588 Fax 078-362-4453
西 斗志夫	JICA Expert, Land Readjustment and New Town Project Division, Dept. of Town & Country Planning, Ministry of Interior 224 Rama 9 Rd., Bangkok 10320, THAILAND Tel. +66-2-201-8146 Fax +66-2-247-9096
西脇 敏夫	佐世保市役所 自宅 〒857-0877 佐世保市万津町4-2-801 Tel. 0956-25-8737 Fax 0956-25-8737
久 隆浩	近畿大学理工学部土木工学科 〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 Tel. 06-6730-5880 Fax 06-6730-1320
福永 知義	㈱横総合計画事務所 〒150-0035 渋谷区鉢山町13-4 ヒルサイドウエストC棟 Tel. 03-3780-3880 Fax 03-3780-3881 〒780-0901 高知市上町4-11-5 Tel & Fax. 0888-75-3757
山崎 康右	

広報・出版委員会

土田 旭	石崎 均
澤木 俊間	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
作山 康	